

弘前藩の刑法典 (二) — 寛政律 —

橋 本 久

目 次

はじめに

一 安永律〔前号〕

二 寛政律〔本号および次号以下〕

三 文化律

二 寛 政 律

(一) 御刑法書之写

凡 例

- 一 弘前市立弘前図書館所蔵岩見文庫本を用いた。
- 一 表記法については前号に倣った。

- 一 必要に応じて新たに書き入れた箇所は〔 〕で示した。
- 一 便宜上、各項に一〇〇、条ごとに一〇〇の数字を仮に付した。附についても同様に、一〇四八を付した。
- 一 京大本に見られない文については、冒頭に※を付した。

※御自筆之写

刑法 沙汰之通申付候、尤一鉢刑法之義、兼而一定之候得共、
〔上ニ脱〕
 猶其時宜ニ寄り軽重之沙汰も可有之事ニ候、且ケ条ニ適當ニ之罪
 人有之候共、何れ君臣之義を立、父子之親ニ基ぎ、総て人論の
〔下、〕
 義を論し、其時之沙汰致候様、依之必しも其ケ条ニ不可泥事ニ
〔下、〕
 候、寛政也、

※ 覚

資 科人片付之義、区々之沙汰有之候ニ付、此度御刑法被 仰付之申出之趣被遊 御聞届、猶又以 御自筆被 仰出候間、致勸弁批判、遂穿鑿、勸善懲惡ニ相成候様、沙汰可有之旨、四奉行江能々可申合候、以上、

三月

御用人中

御家老

※ 目 録

- 〔一〕 一戸ノ
- 〔二〕 一鞭刑
- 〔三〕 一追放
- 〔四〕 一徒刑
- 〔五〕 一死刑
- 〔六〕 一贖刑
- 〔七〕 一五逆ノ事
但惡逆不道不敬不孝不儀〔マ、〕
- 〔八〕 一老幼廢疾之事

- 〔九〕 一科人ハ首徒可分事〔マ、〕
- 〔一〇〕 一一人ニテ二罪有之事
- 〔一一〕 一五軒組合列座可及ケ条事〔マ、〕
- 〔一二〕 一科人自身申出候者
- 〔一三〕 一親族ハ罪を隠御用捨之事
- 〔一四〕 一親族輕重之事
- 〔一五〕 一罪可減者累減得事
- 〔一六〕 一婦人犯罪ノ事
- 〔一七〕 一不義財物取捌候事
- 〔一八〕 一同類内出奔有之
片口ニ相成候者之事
- 〔一九〕 一罪科加減ノ事
- 〔二〇〕 一關所ノ事并取押物之事
- 〔二一〕 一人を謀殺候者
- 〔二二〕 一親を謀而殺候者
- 〔二三〕 一親族ノ謀殺
- 〔二四〕 一謀テ主人ヲ殺候者
- 〔二五〕 一姦因テ夫を殺候者
- 〔二六〕 一一家三人ヲ殺候者
- 〔二七〕 一頭分之者謀殺致候者
- 〔二八〕 一頭分之者謀殺致候者

- 〔二九〕 一呪祖毒藥之事〔マ、イ、〕
- 〔三〇〕 一打擲にて人を殺候者
- 〔三一〕 一怪我にて人を殺者
- 〔三二〕 一夫有罪ノ妻ヲ殺者
- 〔三三〕 一人を過て死有者〔マ、イ、〕
- 〔三四〕 一人殺ノ者内濟致候者
- 〔三五〕 一喧嘩打擲ハ疵の輕重を以罪を定候事
- 〔三六〕 一疵療治の事
- 〔三七〕 一勢を以人縛打擲致候者
- 〔三八〕 一下人主人ヲ打擲致候者
- 〔三九〕 一妻妾夫を打擲致候者
- 〔四〇〕 一兄弟の打擲
- 〔四一〕 一師匠を打擲
- 〔四二〕 一父祖人ニ被打擲其子孫〔マ、イ、〕
一返打の事
- 〔四三〕 一窃盜之事
- 〔四四〕 一御城中江入盜の事
- 〔四五〕 一自分預り物紛失致候者の事
- 〔四六〕 一御蔵財物盜取候者
- 〔四七〕 一強盜ノ事

- 〔四八〕 一白昼人の物を搶集候者ノ事〔マ、イ、〕
 - 〔五〇〕 一馬盜ノ事
 - 〔五一〕 一盜袖ノ事
 - 〔五二〕 一流木流失盜揚之事
 - 〔五三〕 一田の殺物盜取候者〔マ、イ、〕
 - 〔五四〕 一夜中無故人家江入候者
 - 〔五五〕 一盜人の宿致候者ノ事
 - 〔五八〕 一謀書謀判致候者之事
 - 〔六〇〕 一似セ金銀を作候者
 - 〔六一〕 一枉法賄賂之事
 - 〔六三〕 一坐贓之事
 - 〔六四〕 一賄賂約諾致候者
 - 〔六五〕 一賄賂行候者之事
 - 〔六六〕 一茂合錢取立私曲致候者
 - 〔六七〕 一隠田畑之事
 - 〔六八〕 一田畑質入之事
 - 〔七〇〕 一御取納遲滞
 - 〔七一〕 一内借之事
 - 〔七二〕 一手越訴狀差出候事
 - 〔七四〕 一不実之事致訴狀候事
- 〔四九 脱〕
- 〔五六・五七 脱〕
- 〔五九 脱〕
- 〔六二 脱〕
- 〔六九 脱〕
- 〔七三 脱〕

料

資

- 〔七五〕 一親族相訴候者
- 〔七六〕 一子孫父母之教ニ背候者
- 〔七七〕 一訴狀之致腰推候者
- 〔七八〕 一強訴之事
- 〔七九〕 一隠津出之事
- 〔八〇〕 一隠荷揚之事
- 〔八一〕 一隠商売乃事
- 〔八二〕 一博奕之事
- 〔八三〕 一御用事頼合致候者
- 〔八四〕 一人の罪を輕重致候者
- 〔八五〕 一失火之事
- 〔八七〕 一御触ニ背候者之事
- 〔八八〕 一不可為義致候者
- 〔八九〕 一科人手向致候者
- 〔九〇〕 一科人出奔之事
- 〔九一〕 一科人隠候者
- 〔九二〕 一私ニ舛秤造候者
- 〔九三〕 一御閑所忍通候者
- 〔九四〕 一立居候者之事
- 〔九五〕 一馬札紛失之事

〔八六 脱〕

- 〔九六〕 一姦淫之事
- 〔九七〕 一僧尼犯姦之事
- 〔九九〕 一相对死之事
- 〔一〇〇〕 一隠遊女之事

覺

此度御刑法御改被 仰付候ニ付、沙汰仕候処、明律ハ歴代之刑法を致損益相立候義ニ付、律之輕重宜、義理共ニ正敷御座候得共、當時ニ比ヘ候得ハ、一牒律重ク御座候間、明歴ニ而答罪ニ相当候類ハ、大形當時戸^ノにて相振合ニ御座候而、猶又刑法も違候間、其儘ニ而ハ難用得、依之當時通例行ヒ候刑名を以、明律之格ニ随ヒ、差等相立、專其義理ニ依リ、輕重相分リ申候、尤右之内 公義御定ニ抱候義、是迄之御刑法にて俄ニ輕重難相立分ハ、与得沙汰仕、斟酌加減仕候間、此末御刑法御沙汰御座候節、若此度相定候ヶ条之内、洩候義御座候而も、右之趣を以、明律を参考致、罪之輕重無之様被 仰付候様奉存候、則此度相定候御刑法名目と明律刑名との相当差等如左、

戸^ノ 明律 答

五日 十
十日 二十

弘前藩の刑法典 (二)

死刑	一年半同三十	明律死刑	三千里 同一百
	一年 同三十		二千五百里同一百
	半年 鞭三十		二千里 杖一百
徒刑	三十 十里大場御構	明律流刑	同一百
	廿七 七里		二年半 同九十
	廿四 四里		二年 同八十
	廿一 三里		一年半 杖七十
	十八 所私		一年 杖六十
鞭刑	十五	明律徒刑	一百
	十二		九十
	九		八十
	六		七十
	三		六十
鞭刑	三十日	明律杖刑	六十
	廿日		四十
	十五日		三十

※

斬	絞
獄門	斬 秋後
火刑	火刑ハ、火付ヲ極テ重科ニ相立候 公義御定ニ付、明律相当無之、
	磔 斬 即次 <small>〔マ、〕</small>
	御刑法御定 定例
	御刑法名目
戸 <small>ノ</small>	点羽、戸 <small>ノ</small> 之義、是迄日数幾日ニ相成候間御免被 仰付候様申上候得は、以来幾日戸 <small>ノ</small> 被 仰付候様ニト日数ヲ記申上候義、辰八月伺済、
戸 <small>ノ</small>	五日 十日 十五日 廿日
三十日	文化五辰年村方戸 <small>ノ</small> 過料ニ被仰付候様伺左之
但、子、兄弟或ハ奉公人之類、戸 <small>ノ</small> 難相成者ハ、右之日数之通、過料人或ハ一日	通済、
	五日 六百文
	十日 九百文

料

六十文積ヲ以過料錢差出候事、

十五日

一貫二百文

廿日

一貫五百文

三十日

一貫八百文

資

〔二 鞭刑、脱〕

〔2 なし〕

三

鞭刑追放五

3

鞭十八 所払

鞭廿一 三里

鞭廿四 五里

鞭廿七 七里

鞭三十 十里大場御構

但、追放ハ鞭十八以上ニ候得ハ、其罪ノ子細ニヨリ、

其所ニ難差置者ハ、鞭數ニ不抱所払可致事、

四

徒刑三

4

徒半年鞭三十

徒一年鞭三十

徒一年半鞭三十

但、徒刑ノ者ハ、銅鉛山江差遣、鞭刑ノ上、年限ノ通

〔マ、〕
苦使可致事、

五

死刑四

5

斬 獄門 磔

火刑

六

贖刑

鞭三八

過料三貫六百文

同六

同 四貫二百文

同九

同 四貫八百文

同十二

同 五貫四百文

同十五

同 六貫文

同十八

同 十二貫文

同廿一

同 十五貫文

同廿四

同 十八貫文

同廿七

同 廿一貫文

同三十

同 廿四貫文

徒半年

同 三十貫文

同一年

同 三十三貫文

同一年半

同 三十六貫文

死罪

同 四十二貫文

右過料ハ、老幼廢疾之類、刑ニ不可行者、并過ニテ人を殺或ハ疵付候類、相当ノ過料ニテ罪贖セ可申事、

7 一過料ノ者貧困ニテ上納難相成者ハ、銅鉛山江差遣、一日六十文ノ積ヲ以テ夫役ニ使可申事、若老幼廢疾ノ類、夫役ニモ難相成者、其身牢舎ノ上、一年或ハ二年ニテ用舎可致事、

七 五逆之事

8 一惡逆

祖父母を打擲致、或ハ殺さんと謀、伯叔父姑兄姉方之祖〔母脱〕父母を殺し、夫を殺候者ノ事、

9 一不道

一家の内、死罪にあらざる者三人を殺、并人の死骸を切ほとき、むこく切害致候者の事、

10 一大不敬

御宗廟御飾物并御召物等盜取候者の事、

11 一不孝

祖父母父母の事を訴へ、或ハ惡口致、并父母の扱不宜難洩せしむる者の事、

12 一不義

支配之者、頭分の者を殺し、弟子として師匠を殺し候者の事、

八 老幼廢疾之事

13 一年七十以上十五才已下并廢疾の者、死罪以下贖にて用捨可致事、八十以上十才已下死罪を犯候者ハ、上聞の上、時宜御沙汰可被仰付事、盜賊并人ニ疵付候者、贖を出させ可申

事、其余の罪ハ御構無之候、九十以上七才以下ハ、死罪にても刑を不可加事、

但、罪を犯候節、未老疾ニ無之候共、事頭候節、老疾ニ

候得ハ、老疾を以御沙汰可致事、幼少の節罪を犯、壮年

ニ至リ候て事頭候得ハ、幼少之例を沙汰可申事、〔以脱〕

14 一廢疾の事、惣而人事にはつれ候片輪、病人を言也、馬鹿乱

心の類も廢疾と可致事、

九 科人ハ首徒〔徒〕を可分事

15 一二人以上犯罪候節ハ、其内趣意相企候者、首〔中合、脱〕を致候事、其

余ハ徒〔徒〕と致候事、徒の者ハ首〔首〕罪一等可減事、尤本文ニ同

類不殘と有之ハ、首徒差別無之事、

一〇 一人にて二罪有之事

16 一凡而二罪以上共に頭候節ハ、重き者一ケ条を以、罪を定候

事、若一罪先に頭、既ニ刑を加ヘ候後、外の罪頭候節ハ、

輕き者并ニ同等の科ハ御沙汰ニ不及、若後ニ頭候科重候ハ

、沙汰直ニ致、前罪の鞭数を差引、残り鞭数斗刑を加候

事、

一一 五軒組合連座ニ可及ケ条之事

一七 一隱田畑 一隱津出 一盜杣 一博奕宿 一隱商賈

21 右ケ条之内、罪ヲ犯候者、組合の者、本人の罪ニ相当を以、
過料ニ直シ、組合四軒自差出候事、

但、組合四軒ニ不満候者ハ、四軒の割合を以、不足の分
ハ用捨の事、

一一 科人自身申出候者

22 一愆而悪事致候者の事未_レ頭已前ニ自身申出ニ於テハ、其罪
用捨被 仰付候事、

但、人ヲ疵付、或ハ物ニ寄り不可贖品、并姦通之類ハ不
許、

23 一窃盜、或ハ手段等にて人の財物を取り、其後過を悔候て自
身_ヲ本人江返し候者ハ、上ニ申出と同前、其科可許事、

一一三 親族の者罪を隠候而茂御用捨の事

24 一父母兄弟伯叔父姑夫婦ノ間、罪有之、隠候ても、御咎無之
事、

但、其事洩候て逃去しむるとも不可罪事、家來、主人の
為に隠も、是又同前の事、其外妻の父母、娘の躰、夫の

兄弟相隠候節、平人ノ罪三等を減可申事、

一四 親族輕重之事

25 一本文ニ祖父母と有之ハ、高祖、曾祖同様の事、孫と有之ハ、
曾孫、玄孫同様の事、嫡孫承祖ハ父母と同様、嫡母養母ハ
実母同様の事、

一一五 罪可減者ハ累減を得る事

26 一譬ハ罪を犯者、首と徒と有之時、其徒の者ハ罪一等を減候
上、其者外ニ可減子細有之時ハ、又幾度も段々ニ而減可申
事、

一六 婦人犯罪を候事

27 一婦人の犯罪ハ鞭十五ニ不可過、十五以上ニ相当候節ハ、十
五の鞭切にて、残數ハ過料にて罪を可贖事、
28 一婦人の鞭刑ハ、褌半の上より打可申事、

但、姦淫の罪ハ、衣を去、直ニ可打事、窃盜の類ハ入墨
を許可申事、

一七 不義の財物取捌の事

29 一財物の上にて罪を犯候者、本人、相手共に罪有之時ハ、其

物没納可致事、若相手方有罪、本人罪無之時ハ、其財物本人江返し候事、

30 一其財物没納可致者、并本人江可相返者、既ニ費シ用候而も贖可令出事、若科人身死候て、品物費し用得候節ハ、取立るに不及事、

一八 同類の内出奔有之片口ニ相成候者之事

31 一同類の内、一人ハ出奔致、一人ハ召捕候節ハ、其者出奔致

候者を本人の旨申出、別ニ証人無之時ハ、其者ハ徒ニ致、刑を加ヘ可申事、其後出奔致候者を召捕候而糺明致候節、最初の者本人ニ相違無之分ハ、則首徒と致、〔マ、〕残て刑を加ヘ候事、

一九 罪科加減之例

32 一加とハ本罪の上に猶加へて重く致候事、減と云ハ本罪の上を猶減して軽く致事、

但、減候節ハ、四段の死罪、三段の徒、各一等ト致、減候事、○鞭刑ニ致候而ハ、三鞭ツ、の一等を減ヘき事、

○加ヘ候節ハ、一段毎に一等と致候事、猶加罪ハ徒一年

半鞭二十を限にて、加数死に不為人、加テ死ニ可入者ハケ条ニ其訳断有之事、

〔頭註〕
○此印より同印迄追加有之者已五月被仰付之

二〇 闕所之事

33 一闕所之事、鞭三十以上、専利欲ニ拘候者ノ科ハ、其利欲輕重ニ寄り、田畑或ハ家屋敷、家財等闕所可申付事、重罪にも利欲ニ不抱者ハ、律のケ条出候外ハ、闕所不可致事、

二一 取押物之事

34 一惣而禁ヲ犯候者を取候義、其掛合役筋之者ニ無之候得ハ、其品取押候者へ被下置候事、其役筋にて取押候得ハ、押物の多少ニ寄り、御賞被下置、其品ハ没納可致事、

凡而犯禁の者取押候得ハ、何役ニ不抱、一統其品にて取押候者江被下置候、伺濟、

但、山方役人廻先、犯禁の木品取押候得ハ、其品入札払被仰付、不被下置候事、尤向々役人出会见分等ニ而過木等取押候節、右出会山方役人入加候得ハ、前節同様、不被下置候事、

文政元年寅八月廿二日

資

人命

二二 人を謀て殺候者

- 35 一 宿意を以て謀て人を殺す候者、其張本人ハ獄門、加担手伝致殺者ハ斬罪、加談斗にて手伝不致者ハ徒一年半鞭三十、
- 36 一 疵付候斗にて不死時ハ、張本人斬罪、加担手伝ハ徒一年半鞭三十、

- 37 一 謀而殺事行ひ候へハ、疵付不申候共、張本人鞭三十、加担手伝の者鞭十五、

- 38 一 右之張本人、縦ハ其場ニ不臨候共、殺候節ハ、其身手ニ懸殺同前、疵付候節ハ手ニ掛疵付同然之事、加担の者ハ其場ニ不臨候得ハ、其場ニ臨ミ候者ハ罪一等許可申事、

- 39 一 若因之財物を取り候得ハ、強盜の律に随ひ、張本人、加担之差別なく、^{〔殘賂〕}不磔
- 但、同行の内にて財を分ケ不申候得ハ、謀殺の律にて

捌候事、

二三 謀而親を殺候者

- 40 一 謀而親を殺候者、男女に不限、肆の上鋸引、婦人、夫ノ父

母を殺候者も同前、

但、鋸引の者、罪の次第、建札ニ致、於往来道路、肆候事、三日往来の者勝手次第鋸引致セ候事、右日限相濟候迄、鋸引致候者無之候節、引廻之上磔、

- 41 一 殺逆の事、既ニ行候得ハ、縦疵付不申候共、磔、
- 42 一 親類ノ者、妻子不殘遠追放、家屋敷家財隠所、
但、子にても別居の者ハ御用捨の事、
- 43 一 親を殺シ者、於自滅ハ、死骸塩漬之上磔、

二四 親族の謀殺

- 44 一 祖父母を殺さんと謀、既ニ行ひ候得ハ獄門、殺候得ハ引廻之上磔、但、母方ノ祖父母同様の事、

- 45 一 婦人、夫の祖父母并夫を殺候者、右同様の事、

- 46 一 伯叔姉兄姉ハ謀殺既に行ひ候へハ徒一年鞭三十、疵付候得ハ獄門、殺候得ハ磔、

〔47 なし〕

- 48 一 伯叔^{〔父姉〕}甥姪を謀殺致、兄姉の弟妹を謀殺候者、斬罪、

二五 謀而主人を殺候者

- 49 一 謀て主人を殺候者、男女に不限、肆者鋸引、

但、疵付候得へ、凡て子の父母へ対候ト同様之事、

50 一下人、他の主人を殺候者、磔、

但、下人、主人を暇出、外奉公致罷在、本の主人を殺候者、他の主人殺候と同様の事、

二六 姦ニ因て夫を殺候者

51 一妻妾、他人と姦通致、依て夫を殺候者、引廻之上磔、姦婦ハ獄門、若男の手段ニ而、女其謀を知らずといへとも、女ハ斬罪、又女の手段斗にて、男其謀不知時へ、唯姦夫ノ刑ニ一等を加て罪に行ひ候事、

52 一妻妾、人と姦通致候を、現在姦通の処にて己見届、則時ニ殺候者へ、御咎無之事、若其場を立去り、後訴茂無之擅ニ殺候者へ、喧嘩にて人を殺候と同様の事、

二七 一家三人を殺候者

53 一家の内非死罪人三人を殺、并人の死骸を切ほとき、むこく殺害致候者、引廻之上磔、家財欠所、死者の家江被下候事、妻子ハ遠追放、加談致候者、手伝致候者共、獄門、但、追放ノ事、別居の子ハ御用捨の事、

二八 頭分ノ者謀殺致候者

54 一支配の者、頭分の者を殺さんと謀、既に行候得ハ徒〔半匹〕年三

十、疵付候得は斬罪、殺候得ハ磔、

二九 呪詛毒薬

55 一呪詛調伏等を以、人を殺さんと謀る者へ、謀殺の律を以、罪ニ行ひ候事、若唯人を苦しめんと謀候得へ、二等を減候事、毒薬用ひ候も同様之事、毒薬ハ買未用の鞭三十、其事を知り薬を売候者同罪、不知時ハ御咎無之、

三〇 打擲にて人を殺候者

56 一元の巧候而殺候心にて無之、一時ニ喧嘩打擲ニ而人を殺候者ハ斬罪、尤相手の方理不尽之致方ニ而、不得止事於切害ハ、相手方親類、名主詮義之上、被殺候者、平日不法者ニ相違無之候へ、死刑二等を減シ可申事、

57 一同謀て人を打擲致候、因て死ニ至候得へ、急所の疵を得させ候者を、解死人に可致事、

但、最初事を企候者ハ徒一年半鞭三十、余人ハ何れも鞭十五、

三一 ^{〔マ、〕} 輕我にて人殺候者

58 ^{〔マ、〕} 輕我にて人殺し或ハ疵付候者、打擲の律ニ因テ贖を取、其者江被下置候事、

59 一途中車馬にて人過候者、緩怠の事無之者、輕我を以沙汰可致事、若不慎の義於有之ハ、打擲の律を以刑可加事、

60 一危ぎ仕事を致し、因て人を殺し候者、贖ニ難相成、打擲の律を以刑を可加事、

61 一喧嘩等にて傍の人を殺し疵付候者、喧嘩にて人に疵付候と同然たるへき事、

62 一若又謀て人を殺さんとして過て別の人を殺、疵付候者ハ、謀殺を以沙汰可致事、

三二 夫有罪之妻妾を殺候者

63 一妻妾、夫の祖父母を打擲等ニより、其夫打て死ニ至候得ハ、御構無之、若又強て擅ニ殺候得ハ、鞭十五、

但、外の罪等ニ寄り、打殺ハ解死人たるべく事、

64 一夫、妻妾を打捌、或ハ罵り等致候ニ寄り、其妻妾自害候者、不及御沙汰候事、

但、重き疵等を負セ候節ハ、夫、妻妾を打捌の律ニ因テ

沙汰可致事、

三三 人を逼て死を致候者

65 一事に依て人を逼り、其人自殺致候者、鞭十五、并金貳両を出さしめ、死有之家江被下置候事、

若姦を行ひ、盜を致候ため、人を逼り死を致候者ハ獄門、

三四 人殺の者内済ニ致候者

66 一祖父母父母、人の為に殺され、其子孫内済致候者、徒一年半鞭三十、夫被殺候て内済致候者、同然、伯叔父姑姉姉ハ二等減可申事、

若子孫、人の為に殺され、祖父母父母内済致候者、鞭九、常人の内済ハ鞭三、

67 一内済のため賄とり候者ハ、錢の高を以、窃盜ニ準シ、重キ方にて沙汰可致事、

但、父母殺され賄を取候者、死罪、

68 一同居或ハ同行の人、初る其人を謀害せんとする事存ながら不留者、并殺され候後不訴者、鞭十五、

打擲

三五 ^{〔或、〕} 喧嘩打擲ハ疵の輕重を以定候事

69 一手足ハ外の物を以、人を打擲致候者、戸ノ十日、疵付候得

ハ、戸^マ廿日、

但、打処不破候共、青赤ニ腫候を、疵と定候ノ事、

70 一血、鼻口の内^マ出、或ハ内損、血を吐候者、鞭九、不淨の物を以、人の頭面を汚候者、右同様之事、

71 一齒^マ杖、手足の指^マ本を折、一目を傷并耳鼻傷候者、鞭十五、湯火を以人傷候者、不淨を以人の口鼻入候者同様之事、

72 一齒^マ杖、指^マ本以上を折候者、鞭十八、

73 一人の骨を折者、兩眼を傷、或ハ婦人の胎^マを墮并一切之刃物の切疵ハ、鞭二十四、

但、兵器にて柄^マを折候ハ、刃物にハ無之事、

〔74 なし〕

75 一兩手足を折、或ハ兩眼を潰し、或ハ持病ニ有之所打て因之廢疾に至らしむる者并二人の陰陽を傷ひ候者ハ、徒一年半鞭三十、右科人家財半分を以、疵を得候者江被下置候、右之条々、科人大勢にて犯候節、其内疵付候者を重罪ニ致候事、尤本趣意企候者ハ、疵付不申候共、其次之科ニ申付候事、

但、疵を得候者若死ニ至り候得ハ、同行の内人を殺不留之律ニ依て、鞭十五、

〔喧嘩にて双方疵有之無之事〕

76 一喧嘩にて双方疵を得候節、双方の疵相改、疵軽重ニ而罪を定候事、尤跡^マ手下シ理直キ方ハ、二等減可申事、

三六 疵療治の事

77 一疵を蒙り候者、日限を定、打擲の者^マ療治致セヘキ事、日限の内^マに死候得ハ、打擲の者可為解死人事、若日限の内にても疵平愈致候断出候後、余病にて死候得ハ、唯打擲の罪可加事、

78 一指^マ本折候以上之疵、日限の内療治にて平愈致候得ハ、罪二等を相減、日限滿候迄平愈無之者ハ、右の本律を以相用ひ候事、尤婦人破産并病氣平愈にても痼疾ニ至ラハ罪減中間敷事、

79 一手足其外の物にて輕き打疵ハ廿日限、金創火毒ハ三十日限、手足を打骨痛婦人の墮胎ハ五十日限、

三七 勢ヲ以テ人ヲ縛打擲致ス者

80 一争論によりて人を縛り打擲致し、或ハ於私家ニ人を押こめ等致し候者、鞭九、若疵重く内損吐血以上ニ至り候得ハ、平人打擲^マる二等を加可申事、尤目分^マを下し不申共、差圖を

料

致者、本罪ニ可致事、若差図を受、手を下し候得ハ、一等可減事、

三八 下人主人を打擲致候者

81 下人として主人を打擲致候者、獄門、死ニ至候得ハ、鋸引

82 怪我にて殺候得ハ、御沙汰ニ不及候事、折傷以上之疵ハ、〔脱文アリ〕

平人打擲ル四等減可申事、死ニ至候得ハ、鞭十八、怪我にて殺候得ハ、御沙汰ニ不及事、

三九 妻妾夫を打擲致候者

83 一妻、夫を打擲致候ハ、鞭十五、折傷以上の疵ハ、平人

三等ヲ加ヘ可申事、一目潰し候以上ハ、斬罪、死ニ至候得ハ、磔、

84 一若妾ハ夫并妻を打擲致候ハ、又一等を加ヘ可申事、死ニ至候得ハ、磔、尤加るものハ加て死に入候事、

85 一夫、妻を打擲致候者、折揚〔折、〕以上ニあらざれハ、御沙汰ニ不

及事、右以上ハ平人の律に二等を減可申事、死ニ至候得ハ斬罪、妾を打擲致し折揚〔折、〕以上ニ至り候得ハ、又二等を減可

86 申事、死ニ至り候得ハ、鞭三十、妻の妾を打擲致候得ハ、夫の妻を打擲致候と同様の事、怪我ニ而殺候ハ、其証拠

分明ニ於てハ不及御沙汰事、

四〇 兄弟之打擲

87 一弟并妹として兄弟を打擲致候、鞭二十七、疵付候得ハ、鞭

三十、折傷徒一年半鞭三十、刃傷ニ及、手足を折、一目を潰し候以上ハ、斬罪、死ニ至候得ハ、獄門、伯叔父姑を打

擲致候者、同様の事、怪我にて殺し或ハ疵付候者、本殺傷之罪二等を減可申事、尤贖ニハ難相成候、

88 一兄弟の身として弟妹を打擲にて殺、伯叔父姑の甥姪ヲ打擲ニ而殺候者、鞭三十、怪我にて殺、証拠分明ニ於てハ御沙

汰ニ不及事、

89 一子孫として祖父母父母を打擲致し候者并妻として舅姑を打擲致候者、獄門、死ニ至候得ハ、鋸引、怪我にて殺候得ハ、

斬罪、

90 一祖父母父母、子孫を打擲にて殺候者、鞭十五、継母ハ一等ヲ加ヘ可申事、但、子孫、祖父母父母を罵り或ハ打候ニヨ

リ、打擲致し死ニ至り候得ハ、御沙汰ニ不及候、怪我にて殺候も、同様の事、

四一 師匠を打擲候者

91 一 師匠を打擲致し候者、平人に二等を加へ可申事、殺候得ハ磔、

四二 父母人に打擲被致其子孫打返候者

〔父母人懸〕

92 一 祖父母の為に打擲せられ、其子孫救候為打返候者、輕き疵ハ御沙汰ニ不及、折傷以上ニ至候得ハ、平人の打擲る三等を滅可申事、死ニ至候得ハ、定法之通可為、下手人事、

盜賊

四三 竊盜

93 一 盜致候、入墨の上、盜取候高ニ応し、輕重罪科ニ可行事、定

- 一 一十貫文以上 入墨鞭三
- 一 一十貫文以上 鞭六
- 一 二十貫文以上 同九
- 一 三十貫文以上 同十二
- 一 四十貫文以上 同十五
- 一 五十貫文以上 同十八
- 一 六十貫文以上 同二十一
- 一 七十貫文以上 同二十四

一 八十貫文以上 同二十七

一 九十貫文以上 同三十

一 百貫文以上 徒半年同三十

一 百十貫文以上 徒一年同三十

〔一 百二十貫文以上 徒一年半同三十、脱〕

一 百三十貫文以上 斬 但徒ノ者死罪一等許候事、

右錢高を以、罪の輕重を定候義、盜取候品、幾人にても分候而も、分前の高ニ不抱、盜取候本高を以、一人毎ニ罪を加へ候事、尤徒の者ハ一等を滅可申事、

但、一時ニ於數家盜取候節、其内唯一家の財多き高ニ而罪を定候事、米穀等ハ時の直段を以錢ニ直し、品物直致セ、錢ニ差積可申事、

94 一 盜ニ入候者、財物を取り不申候得ハ、鞭三、入墨御許之、但、人の土藏を破り、或ハ盜ニ入候次第ニ寄り、大盜ニ紛無之候ハ、財物ニ不抱、入墨鞭三十、

95 一 入墨之儀、腕江廻し幅三分程入墨可致、尤初度右腕ニ彫り、二度目ハ左り、三度ニ及候得ハ、不寄多少、斬罪、

四四 御城中江入盜致候者

96 一 御城中江忍入、盜致候者、獄門、

但、寛政十一未年四月、表坊主棟方嘉林隠居之後、病屈ニ而御城中へ紛れ入候ニ付、死罪一等許、徒刑ニ被仰付候例、

四五 自分預物私曲致候者

97 一 御預り之物を致私曲盜取候者、首徒差別無之、盜取候錢高を以、罪を定候事、尤幾人にて分ケ前の高に不抱、盜取候本高を以、一人毎ニ罪加へ可申事、

定

- 一 貳貫五百文以下 入墨鞭九
- 一 貳貫五百文以上 同 十二
- 一 五貫文以上 同 十五
- 一 七貫五百文以上 同 十八
- 一 拾貫文以上 同 廿一
- 一 十二貫五百文以上 同 廿四
- 一 十五貫文以上 同 廿七
- 一 十七貫五百文以上 徒半年同三十
- 一 二十貫文以上 徒一年同三十
- 一 三十貫文以上 徒一年半同三十
- 一 四十貫文以上 死罪代り徒二年同三十

四六 御藏財物盜取候者

98 一 御藏の財物盜取候者并御藏廻り之者共、御藏之財物を致私曲候者、首徒〔マ、〕の差別無之、元盜取候錢高を以、罪を定候事、尤幾人にて分ケ前の高ニ不抱、盜取候本高を以、罪を加へ候事、尤一人毎ニ罪を加へ候事、

定

- 一 五貫文以下 入墨鞭六
 - 一 五貫文以上 同 九
 - 一 十貫文以上 同 十二
 - 一 十五貫文以上 同 十五〔マ、〕
 - 一 二十貫文以上 同 十七
 - 一 二十五貫文以上 同 廿一
 - 一 三十貫文以上 同 廿四
 - 一 三十五貫文以上 同 廿七
 - 一 四十貫文以上 同 三十
 - 一 四十五貫文以上 徒半年同三十
 - 一 五十貫文以上 徒一年同三十
 - 一 五十五貫文以上 徒一年半同三十
 - 一 八十貫文以上 斬
- 但、御藏廻り之者致私曲候得へ、死罪ニ代り徒二年鞭三

十、

四七 強盜

99 一 追剝強盜の者、既ニ行候へハ、財物も取不申候共、徒一年

半鞭三十、既に財物取候得ハ、同類不殘、磔、

100 一 盜ニ入候者、其家の人江手向致し或ハ疵付候得ハ、強盜之

御仕置たるへき事、

但、同類之者助力不致者、窃盜を以、可致沙汰事、

101 一 若窃盜既ニ財物を捨、逃去を其家人追懸、因て手向致候得

ハ、不用此律、科人手向致候律を以て、刑を加へ候事、

四八 白昼人の物を搶奪候者

102 一 白昼人の物を奪取候者鞭三十、若取候品之高多候ハ、窃

盜の罪三等を加へ可申事、徒の者ハ一等を可加事、

103 一 難船等の便に乘し乱妨致候者、同様之事、

104 一 喧嘩等致、因て財物を奪候者、是又同様之事、

105 一 巾着切の類搶奪ニハ無之、窃盜の律を以、刑を加へ候事、

四九 火附

106 一 盜のため火を附候者、火刑、但、燃立不申候得ハ、斬罪、

107 一 火を可附旨張札投文致候者、鞭三十徒二十、
右、文化元子年御所御演説ヲ以加之、

五〇 馬盜

108 一 馬盜売買致候者、斬罪、

五一 盜袖

109 一 盜袖取致候者、袖取之多少を以、御藏財物盜取候律を以、

刑を可加事、但、入墨許候事、

110 一 山節共過木伐候者ハ、伐出候家木不殘取上、多少を以て罪

を加へ候事、前条同様之事、

111 一 御留山ニ而柴薪木等盜取候者、過料一貫文、尤伐出高多候

節ハ、差積一倍之過料可申付事、御留山ニ無之候共、御停

止木伐取候者、同様之事、

但、檜沓本の代り小杉百本、杉雜木沓本代り小杉五拾本、

112 一 山中伐荒有之、科人相知不申節、伐荒多少を以、山下村過

料可申付候事、

113 一 無極印財木売買致者、取上之上、盜物乍存売買致律を以て

刑を加へ候事、

※114 一 伐荒之場所江植付不相成候処ハ、手寄空山見立植付候様、

尤植付多時ハ三ヶ年五ヶ年、
右は巳年濟、

資

五二

〔マシ〕
流木流木盜揚候事

115 一 出水之節流木流失取上候者、見出之上、五ヶ一山師ノ相渡
可申事、若隱置候而、見出候節、隱木多少を以、過料可差
出事、

定

- 一 十本以下 一貫貳百文 一 十本以上 一貫八百文
- 一 二 本以上〔十懸〕 二貫四百文 一 三十本以上 三貫文
- 一 四十本以上 三貫六百文 一 五十本以上 四貫二百文
- 一 六十本以上 四貫八百文 一 七十本以上 五貫四百文
- 一 八十本以上 六貫文 一 九十本以上 六貫六百文
- 一 一百本以上 七貫二百文

五三

田野穀物盜取候者

116 一 田野穀物を盜取候者、窃盜ニ準し、多少を以て罪を定候事、

但入墨同様之事、

〔換入カ〕

野山江野火を附候者、住居之在町引廻之上鞭十五、若本人
相知不申候得ハ、其領分之村所、過料為差出候事、

但、過料之定、郡方別帳ニ条例有之、
117 一 柴草木石の類、人功を以て伐取積置を擅ニ取候者、是又同
様之事、

五四

夜中無故人の家へ入候者

118 一 夜中無故家へ入候者鞭三、其家人則時ニ殺候節は御構無之、
若又既ニ捕置、擅ニ打擲致、疵付候ハ、平人打擲ノ二等
を減、罪を行候事、死ニ至り候ヘハ鞭三十、

五五

盗人之宿致候者

119 一 強盜ニ宿致候者、其身不行共、財物分取候得ハ、磔、財物
取り不申候得ハ、徒一年半鞭三十、

120 一 窃盜之宿致財物分取候得ハ、其身不行共、窃盜之首と可為
同罪事、財物を取り不申候得ハ、一等を減可申事、入墨同
様之事、

121 一 窃盜強盜の盜物存ながら買候者、品物を錢ニ差積り、窃盜
の律ニ二等を減、罪を行候事乍存預り置候者、又一等を減
候事、

但、品物多候共、鞭十五にて許可申事、若不存候得ハ御
構無之、品物ハ本人江返し可申事、

〔五六 勾引〕

122 手段を設け人を勾引候者、鞭三十、因て人を疵付候者ハ斬罪、

五七 入墨を抜取候者

123 盜致入墨被行候者、其後窃抜候者、鞭三、入墨仕直可申事、

五八 謀書謀判致候者

124 御印并奉行諸役人の判を似せ造、諸渡物等を盜取候者、獄門、未財物を不取者ハ、死刑一等を減可申事、

125 似セ印形、似セ手紙或ハ古手形を取拵、公私の物を取候者ハ、窃盜ニ準し、錢之高を以、罪科の輕重を可行事、

但、入墨窃盜同様之事、

126 語らひ手段ニ而取候者、是又窃盜同様之事、入墨ハ許之、

127 二物取ニ無之、申訳のためニ有合の印形を押候類ハ、窃盜ニ準し、一等を減可申事、入墨許之、

五九 役人を似セ候者

128 在々通り役人を似セ、往來の人馬賄等為差出候者、鞭三十、

六〇 似セ金銀を造候者

129 一似セ金銀を造候者并私ニ錢を鑄候者、磔、細工人同罪、其
余加談の者ハ死罪一等を減可申事、
但、似セ金と乍存通用致し候者同様、

六一 枉法賄賂の事

130 一賄賂を^(受賂)枉たる事を致し候者、錢の高を以て輕重之罪ニ可行事、尤何人ハ受候而も、惣錢押合、其高を以罪ヲ相定候事、若枉候事重候ハ、人之罪を輕重致し候も律を以、刑を加
ヘ候事、

定

一 五貫文以下 鞭六 一 五貫文以上 鞭九

一 十貫文以上 同十二 一 十五貫文以上 同十五

一 二十貫文以上 同十八 一 廿五貫文以上 同二十一

一 三十貫文以上 同二十四 一 卅五貫文以上 同二十七

一 四十貫文以上 同三十 一 四十五貫文以上 徒半年

一 五十貫文以上 同三十 一 五十五貫文以上 徒一年半

一 百二十貫文以上 死罪代り徒二年鞭三十

六二 不枉法賄賂の事

法ハ枉スル賄賂受取ヲ云凡テ不義ノ財ヲ贓ト云

料

131 頼を受、銭を取候得ハ、枉たる事無之者、惣銭の高押、但、〔原文〕
忝人ヲ受候得ハ、半分ニ不致事、

定

資

- 一 十貫文以下 鞭三 一 十貫文以上 鞭六
- 一 二十貫文以上 同九 一 三十貫文以上 同十二
- 一 四十貫文以上 同十五 一 五十貫文以上 同十八
- 一 六十貫文以上 同二十一 一 七十貫文以上 同二十四
- 一 八十貫文以上 同廿七 一 九十貫文以上 同三十
- 一 百貫文以上 徒半年 一 百十貫文以上 徒一年
- 一 百二十貫文以上 同三十 同三十

六三

坐贓之事

慈郎切、音藏、吏受財也、凡非
理所得賄賂、皆曰贓

132 差て頼合候事も無之、通例唯財を受候類ハ、坐贓之罪ニ可
行事、尤惣銭を半分ニ致候て罪を定候事、前条同様之事、
尤与へ候者ハ三等を減候事、

定

- 一 十貫文以下 戸^〆廿日 一 十貫文以上 戸^〆三十日
- 一 二十貫文以上 鞭三 一 三十貫文以上 鞭六
- 一 四十貫文以上 同九 一 五十貫文以上 同十二
- 一 六十貫文以上 同十五 一 七十貫文以上 同十八

- 一 八十貫文以上 同廿一 一 九十貫文以上 同廿四
- 一 百貫文以上 同廿七 一 百廿貫文以上 同三十

六四

賄賂約諾致候者

〔133 後に混入〕

〔六五 賄賂を行ひ候者〕

134 下々の者頼事有之、賄賂行候て法を枉候事を行候へハ、差
出候銭高を以て、坐贓之律ニ当、刑を可加事、尤枉候事重
候ハ、重き方にて沙汰可致事、若上たる者強て無抛差出
候ハ、御咎無之事、

〔六六〕

133 賄賂約諾致し、未財物を手ニ入不申共、事を枉候者ハ、枉
法に準し一等を減、罪を加へ不申事、約諾而已ニ而未タ事枉
不申候得ハ、不枉法ニ準し一等を減、罪を可加事、

六六

茂合銭取立私曲致候者

135 茂合銭為差出、私用ニ致候者、枉法を以、罪を行候事、音
信ニ相用ひ、自分使不申共、同様之事、

田宅

六七 隠田畑

136 隠田畑致候者、一反歩ハ廿反歩迄ハ鞭六、五反歩毎ニ一等を加ヘ可申事、

但、隠田畑御取上、隠候反畝一年年貢可差出事、

137 御検見之節、惡地坏振替見せ候者、右之格ニ而一等ヲ減可申事、尤反畝多とも鞭十五にて許之、村役之者存見逃致置候ハ、本人同罪之事、若不存候ハ、五反歩以下ハ許之、五反歩以上ハ右之格ニ而三減〔等を脱〕可申候、尤反畝多共鞭九にて許可申事、

六八 田畑質入

138 一年季を以質入致、田畑年季相済、本人元利返済受戻を求候ヘハ、外年託〔外年託〕し不相返、年来押領致候者、鞭三、年来之小作米可令返事、

六九 田畑押領之事

139 一人の田畑を事に寄り押領致候者、屋敷ハ一軒、田畑弐反歩ハ五反歩迄、鞭三、五反歩毎ニ一等を加ヘ可申事、尤反畝多とも鞭十八にて用捨可致事、
但、年季之小作米令返事、前条同様之事、

倉庫

七〇 御收納之遲滞

140 御收納ハ年々十一月晦日迄皆済可致事、若翌正月迄無故して皆済無之者、御收納高十分ニ割、一分滞候得ハ戸ハ廿日、一分毎ニ一等を加可申事、村役同様之事、尤鞭九迄にて許可申事、

七一 内借

141 御蔵廻り之者御蔵の米銭内借致候者、米銭高を以て窃盜ニ準し罪ニ罪可申事、若掛合之者ニあらされハ一等を減可申事、但入墨ハ許之、

〔142 な し〕

〔訴訟〕

七二 訴訟ニ付手越の訴状

141 一訴状差出候者、其向之支配頭江差出可申事、手越に致し奉行御役人江差出候而も取上申問敷事、

但、願可相立筋を支配頭ニ而取押置、或ハ支配頭非道之取扱有之訴候願ハ、格別たるヘク候事、

七三 無名之訴状

141 一無名訴状投文致候者鞭三、訴状之趣取上沙汰致問敷事、

料

七四

不実之事を致訴状候者

145 一不実之事を申出、人を罪に落さんとする者、鞭刑追放ニ可被行、事を訴候得ハ鞭刑追放たるべく事、

146 一若被訴候人、御沙汰既ニ極り其罪ニ被行候後、不実の事頭れ候ハ、罪に被行候者の刑ニ一等を可加事、死罪被行候得ハ可為解死人事、

147 一若二ヶ条訴候節ハ、〔重、〕実にて重き方ハ偽り、或ハ一事にても軽事重く申出候ハ、鞭数之内、実事の分を差引、残り鞭数を以、刑に行候事、

七五

親族訴候者

148 一子孫として祖父母〔父母殿〕の事を訴へ、妻として夫并舅姑之事を訴候者、鞭三十、虚説を構へ裁許を願候者、斬罪、

149 一伯叔父姑兄姉之事を訴候者、鞭十五、訴候事偽ニ候得ハ、平人ノ罪三等を加へ可申事、

但、被訴候者、科人自身申出候律と同様之事、若シ伯父兄姉非道の事有之、不得止事申出候ハ、可為格別事、

七六

子孫父母之教ニ背候者

150 一子孫として父母の教に違ひ、或ハ養育欠候義有之者、鞭十

五、但、父母の申出ニ寄り刑を加へ候事、

七七

訴訟之腰推致候者

151 一訴訟の腰推いたし候者、或ハ人の為に訴状を造り、人を罪ニ落さんと致候者、本人と同罪の事、

七八

強訴

152 一願難相立義を大勢徒黨致し、支配頭の差図を不相用、於強訴ハ、其棟梁致し候者、鞭廿四、加談致候者ハ一等を可減事、其余一通りの餘黨ハ吟味之上用捨可有事、

運上

七九

隠津出之事

153 一隠津出候者、品物取押、鞭十五、相对致賦り候者、過料尅貫式百文、

但、式百俵已上之隠津出ハ、家財屋敷闕所所払可致事、

貫式百文、

但、米留所忍通候もの、荷物并馬共御取上之筈、
已閏七月廿七日被仰付候事、

御取上之馬入札之上、右代錢取押候者江被下置候事、

米留所忍通り馬取押ニ相成、御詮義之節、自分持馬ニ無之

トカ、持馬有之候而も、外ニ他人の馬ウマかれ候て取押ニ相成

候ハ、申出候節、当人詮義之上、馬貸候者申出有之時

ハ、人別帳并馬帳詮義之上、分明ニ候得ハ、本人江相返可

中事、尤腸元村米留所ニ而馬米取押候節、外人ノ借馬式定

有之、本人江相返候義、伺濟、

※

寛政十三辛酉年二月 右は点羽ニ而本文ケ条之所ニ有

子弟ニ而父兄懸之者ハ、右父兄の馬ニ候得ハ、父兄江相返
候例、天保七申年、

八〇

隠荷揚

155 一 旅船隠荷揚致候もの、品物取押ニ致、相对問屋、鞭六、家

業取放、

八一

隠商売

156 一 隠商売致候者、品物取押、過料可為差出事、

但、過料之定、別帳ニ而戸数方定例有之、

八二

雜犯

博奕

157 一 博奕致候者鞭三、其場之金銀ハ没納可致事、

但、宿致候者同罪可為事、尤其場ニ居合候者之外、同類有

之候共、一々詮義ニ不及事、

但、輕キ宝引、読かるた等致し候ものハ、戸ペ三十日、

八三

御用頼合致候者

158 一 御用事を曲る頼合致もの、戸ペ二十日、頼候者ニ頼を受候

者、同罪の事、若既ニ施行候得ハ、頼を受候者ハ鞭六、頼

候者ハ、其事親戚朋友之為ニ候得ハ、本罪を減シ、自分之

為ニ候得ハ、本罪を輕重致候律を以、刑を加へ候事、是の

為賄路を取候得ハ、枉法の律を以、刑を加へ候事、

八四

人之罪輕重致候者

159 一 依怙過厚を以、人の罪を輕重致者、其増減致候処ヲ以て其

分之罪を加へ候事、若或ハ全く隠、或ハ全偽候得ハ、其本

人罪を以、刑を加へ候事、

八五

失火

160 一 失火致候者、戸ペ廿日、類焼有之候得ハ三十日、因而人を

焼失候得ハ鞭十五、一家の内誰ニ而も手過ち致し候者刑ヲ

加へ候事、

一御宗廟并御城等江類焼ニ及候得へ、徒一年半鞭三十、

161 一諸役所并御藏内ニおゐて失火致候もの、鞭二十四、

八六 野火

162 一山野江野火附候もの鞭三、若本人相知不申候得へ、領分之

村所、過料差出させ候事、

右之ケ条書演にて此ニ加ふる也、

文化三寅十一月、野火付本人住居之町在引廻之上鞭十五

ニ御改被 仰付候、

八七 御触ニ背候者

163 一御触ニ背候者、事軽くハ戸^レ十五日、重キハ三十日、

八八 不可為義ヲ致候者

164 一不可為義を致候もの、事の軽キハ戸^レ廿日、重キハ鞭三、

是ケ条之義は、元來重キ科へ、律ニ正しきケ条有之候得へ、

輕き事ニ至、事變万端ケ条々々々難述候間、右様之義二等ニ

分、此ケ条を以沙汰可致事、

八九 科人手向致候者

165 一科人逃走り、捕手之者江手向致候者、本罪の上ニ二等を加

へべき事、尤人に疵付、折傷ニ至り候得へ、斬罪、

九〇 科人出奔

166 一牢破并預之内繩解き出奔致し候者、本罪ニ二等を可加事、

167 一預り之者不覚ニ而取逃候者、預り人并番人三十日之内ニ捕

候様申付、若捕兼候節へ、罪人の科ニ三等を減、態と逃候

得へ、科人同罪、

九一 科人を隠候者

168 一科人御詮義之者を乍存隠置、或ハ其事を告知らせ逃候節へ、

科人の罪ニ一等を減可申事、

九二 私ニ舛秤ヲ造候者

169 一私舛秤〔造り并、魁〕を通用舛秤を増減致し候奸曲之者、鞭六、

九三 御関所忍通候者

170 一御関所忍通候者鞭九、山越いたし候者ハ鞭十二、

九四 立婦之者

171 一科有、御沙汰之上追放被 仰付候者、御構之地江立婦候得
ハ、鞭三、本の如く追放可致事、

172 一惡事有之、他国江出奔致し、其後立婦り忍居候者、本罪
一等を可加事、

但、本罪輕ク候ハ、御関所忍通候罪ニ二等可加事、

173 一惡事無之、出奔の後、立婦候もの、御関所外へ出不申候得
ハ、過代夫役廿日、

九五 馬札紛失

174 一無札之馬売買致候者ハ、鞭三、

175 一馬札紛失致し候者ハ、過料荳實文、

犯姦

九六 姦淫

176 一姦淫之者鞭九、男女可為同罪事、夫有之者ハ鞭三十、

177 一強淫之者徒一年半鞭三十、未成者ハ鞭三十、

178 一幼女十二歳之以下を姦候者、強淫同様之事、

179 一妻女を許候て姦致せ候者、本夫姦婦何れも同罪之事、

右何れも姦所ニ於て見届、慥なる証抛有之、夫或ハ親族
申出ニ寄り、御沙汰可致事、外ハ訴候類ハ御取上無之、

九七 僧尼之犯姦

九七 僧尼之犯姦

180 一僧尼之者ハ、平人姦淫之罪一等を加へ、還俗為致候事、

九八 下人家長妻女を姦候者

181 一下人として妻女を姦候もの斬罪、妾ハ一等を減可申事、

九九 相對死

182 一男女申合相果候もの、子細無之候得共、死骸取捨、若女を
先ニ殺、男存命ニ候得ハ下死人、男相果、女存命ニ候得ハ、
下手人ニ不及、三日肆之上、乞食手江相渡可申事、

183 一男女共疵斗にて存命ニ候得ハ、是又三日肆之上、乞食手江
相渡可申事、

184 一主人、下人と申合、相果候もの、下人相果、主人存命ニ候
得ハ、下手人ニ不及、乞食手江相渡、主人相果、下人存命
ニ候得ハ、獄門、

一〇〇 隠遊女

185 一御免場所之外、隠遊女抱置渡世致候者ハ、鞭三、

※

資

- 〔一〕 一苦使之例
- 〔二〕 一在方戸^レ代リ過料
- 〔三〕 一苦使代リ牢舎
- 〔四〕 一犯禁之品御片付之例
- 〔五〕 一追放御止之沙汰
- 〔六〕 一過料上納向之沙汰
- 〔七〕 一徒刑之者大赦之義
- 〔八〕 一野火御締
- 〔九〕 一拔參御触
- 〔一〇〕 一盜米錢定価
- 〔一一〕 一無宿者乞食下ケ
- 〔一二〕 一居村ニ而徒刑已上之御仕置
- 〔一三〕 一追放里数定
- 〔一四〕 一無札馬被下方
- 〔一五〕 一流木過料沓歩五厘御用捨之義
- 〔一七〕 一公事訴訟六月限
- 〔一九〕 一犯禁品之内無極印木当人被下方之義

〔一八 脱〕

- 〔二〇〕 一盜袖御片付評義
- 〔二一〕 一伐荒過料木代リ錢納之義
- 〔二二〕 一無極印木品売買之者盜袖当人同罪之事
- 〔二三〕 一御関所入切手紙之義
- 〔二六〕 一秋後死刑之義
- 〔二四〕 一米留所ニ而可取押品之義
- 〔二五〕 一田畑讓渡証文手代印形居方之義
- 〔二六〕 一破船之義ニ付公義建札之義
- 〔二七〕 一御関所通り之義
- 〔二八〕 一無極印木山役江被下方ニ不相成候義
- 〔二九〕 一町在住居御給人長之御暇ニ付家屋敷御取上有無之義
- 〔三〇〕 一家部〔カ〕紛失義
- 〔三一〕 一御印形紙御切手紙印形紛失ニ付過料定
- 〔三二〕 一手段米等附候馬取押候者江被下方之義
- 〔三三〕 一借屋之者之義ニ付大家五軒組合連座過料之義
- 〔三四〕 一配下之義ニ付村役町役戸^レ之定例
- 〔三五〕 一隠津出宿致候御片付之例
- 〔三六〕 一手段米売払候者御片付之例
- 〔三七〕 一津出米致候者御構場所之義
- 〔三八〕 一客船手段ニ付問屋御咎之義

〔三九〕 一罪人取逃候番人御片付之義

〔四〇〕 一他領者御印紙紛失之義

〔四一〕 一山所伐荒扱向

〔四二〕 一野火入過料定

〔四三〕 一内濟扱向之事

〔四四〕 一修驗宗脱衣之義ニ付大行院申出之義

〔四五〕 一現責之義

〔四六〕 一馬盜評義之事

〔四七〕 一盜賊御片付評義

〔四八〕 一隠家業過料之定

御刑法牒附目錄

一 御刑罰之者、其罪ニ寄り徒刑被行、銅鉛山江送遣候ハ、同山懸り役人にて請取、台所中間ニいたし、無給錢賄斗ニ而召使候様、尤一年之者は期月、一年半之者は十八ヶ月、二年之者は二十四ヶ月ニ至リ候ハ、山方懸り役人、苦使相濟候義を、限月前月ニ断申出候様、右之通兼而山奉行江被仰付候様、四奉行沙汰之通

寛政九年十二月五日

※二

一 盜袖并隠田畑、隠津出、博奕之宿、隠商売、右五ヶ条之分ハ、当人御刑法ニ被行候節、五軒組合之者共、本人相当之過料上納被仰付、村役、町役之義ハ、不吟味ニ付、五日ツ、戸被仰付罷有候、尤右之内、隠津出、盜袖、隠田畑之儀ハ、村役戸被五日ニ極限不申候、其子細ニ寄り、其時之御沙汰申上罷有候躰は、此度被仰付候通、前書五ヶ条之分ハ、過料上納被仰付候ハ、格別御締相定可申候、尤町役之儀ハ、戸被之方ハ御締ニ相成可申奉存候間、是迄之通被仰付、村役斗過料上納被仰付候様、左候ハ、過料之定、左之通り被仰付候様、

五 日戸被之代 過料錢六百文

十日戸被之代 同 九百文

十五日戸被之代 同 壹貫貳百文

廿 日戸被之代 同 壹貫五百文

三十日戸被之代 同 壹貫八百文

右之通御定被仰付候様、左候ハ、是迄之通、村役戸被仰付候節、前書之趣ヲ以、過料上納之義、其時々可申上候旨、四奉行沙汰之通、

文化五辰年六月六日

一 在方之者共、戸^レ被仰付候而は、農事差障り并御縮合ニ相成不申候間、以來戸^レ御止被仰付、過料上納ニ被仰付、輕義ハ御叱被仰付候様、乍去弘前町統并ニ九浦町統は戸^レ被仰付候様、然レ共、其事ニ寄り、過料上納ニ被仰付候様、村方ニ而も、郷士手代之類、又ハ大場重立之者は戸^レニ被仰付候様、尚又村役之義ハ、其所ニ寄、戸^レ被仰付候、尤近年 公儀御定書之表并ニ安永年中、寛政年中御刑法取捨之上、四奉行沙汰被仰付候節、御定書之表斟酌仕、在方戸^レ御止之上、過料上納之儀、其節沙汰仕、申上置候、尚又戸^レ代り過料錢上納御定之義ハ、文政五辰年五月被仰付罷在候旨、四奉行沙汰之通、

文化十四年十二月

三

一 尾太銅山并湯野沢鉛山江苦使之者御預之儀、以來御免被仰付度旨、山奉行申出書付被成御渡、吟味仕候処、右兩山江苦使之者被遣御賄被下置罷有候処、大躰は出奔人、追懸人^カ方ニ而御物入、殊ニ騒々敷、金山之義ハ吉左右を折候ニ付、苦使之者は第一出方之障ニ相成候旨、然ハ苦使之儀、寛政八年御刑法帳御改之節、被仰付罷有候処、御預御免之義申出之、隨而以來苦使御止之上、苦使代り入牢之日數、左之

通、

- 一 徒刑半年ニ相当候者 牢舎日數 百日
 - 一同 一年ニ相当候者 右 同 貳百日
 - 一同 一年半ニ相当候者 右 同 三百日
 - 一 二年ニ相当り候者 右 同 五百日
- 但シ徒刑二年ニ相当候者、四百日之牢居被仰付候得は、前書段取ニ相当候得共、徒刑二年之者ハ、死罪之代り、徒刑被仰付候故、牢居日數一増申候、

右之通御定被仰付候様、四奉行沙汰之通り、

文化八年十一月七日

但、罪科ニ相当候者御座候而、日數懸合共御片付被仰付之者斗牢居之上、追而御片付被仰付候節、此度外懸合之者共夫々御片付被仰付候得共、重科之者ニ付、幾日^ル日數何程牢居之上御片付被仰付候旨、牢奉行にて申渡候様被仰付候事、

四

一 役筋取押品御片付之儀、盜柚木并ニ無極印木品御停止木取押之分共、是迄入札弘被仰付候様、沙汰申上罷有候、然処、少分之木品等ハ取押之役筋へ被下置候様、沙汰仕申上候様、

御演説を以被仰付候、然は御制禁物取押之節御片付之儀、
御刑法之表、左之通、

惣而犯禁せし物を取押候義、其懸合役筋之者ニ無之候
は、其品取押候者へ被下候事、其役筋にて取押候者、

押物多少ニ寄り、御賞被下置、其品は御取上ニ可致事、
右之通ニ御座候、尤役筋取押候分、是迄押高之内三ヶ一を
以テ御賞被下置候様沙汰仕申上候処、去々年夏、役筋押米
入札弘之高不残御賞申上候、被仰付候、其後右之通申上罷
有候処、去年正月、奥内村米留對馬林藏米老倭取押之節、
入札弘之申上候処、右躰押米之分へ、以來其品ニ而当人江
被下置候様、沙汰直之上、申上候様、其節御演説を以被仰
付、其後、隠津出米押米并米留所前忍通候節押米之分共、
取押之役筋へ被下置候、畢竟一兩年已來、隠津出御縮相緩
候ニ付、役筋為勵、右之通被仰付候義と奉存候、乍去格別
心を用、遠方迄相廻、取押候分も、番処前之押米同様之御
片付ニ而は、厚薄之詮も無御座候、尚又押米物之類少分ニ
御座候とて被下置候義にては、一躰御片付之例ニ引合不申
様奉存候、依而已來惣而押物仕分、左之通可被仰付哉、
一米留所番所前にて取押之分并湊方ニ而溜懸船相改、隠積又
ハ過料等有之取押候分へ、其品入札弘之上、代錢三ヶ一之

積を以、御賞被下置候様、其外之抜米、隠津出取押候へ、
其品不残被下置候様、

御用所御点羽半分通被下置候様、

一盜抽取押木并無極印木品、御停止木、凡而山役人手にて取
押候分、是迄入札弘被仰付、其度々御賞不被下置、山奉行
ニ而年中之処相束、極月ニ至り御賞被下置候趣ニ御座候、
其訳ハ式拾程(年忌)已來、協通番所之外、山番所引取被仰付、山
役人弘前勤相成ニ付、山元并在浦之無差別、見当次第取押候
趣ニ而、御極印打入方并凡而御用序而往来ニ心を付候義、
不断勤内御座候、殊ニ前々々押米杯之例とハ違申候間、是
迄之通被仰付候様、尤諸目付并郡方支配手に而取押候分ハ
極而當役之仕内と申義ニも無御座候間、押品入札弘之上、
代錢三ヶ一之積りを以、御賞被下置候様、

御点羽半分通被下置候様、

一隱商売品并其外御制禁物之義へ、其支配方懸り之役人并諸
目付見當取押候分へ、入札弘之上、代錢三ヶ一之積を以、
御賞被下置候様、○御点羽半分通被下置候様、

一惣而押品少分にて、入札高三ヶ一之積を以、御賞被下置候
程之高ニ不至分へ、其品入札弘之上、年中之処ニ而取束、
極月ニ至り、其勤功ニ寄り御賞被下置候様、

一 物而御制禁を犯し御詮儀被仰付能越取押候分、并其支配頭
 の吟味方申付候上は、押物は是迄之通御賞不被下置候様、
 一 役筋ニ無之取押物御片付之分ハ、御刑法帳之通御片付被仰
 付候様、
 右之通被仰付候様、尤、前書ケ条ヲ以沙汰難相成押品之儀
 ハ、時宜御沙汰被仰付候様、○印点羽之外、沙汰之通、

寛政十二申年十月

五

〔欄外書入〕
 「追放御止御沙汰」

一 刑罰は悪者懲之為仕候義御座候間、其悪を懲候程に罪を加
 候而可相成丈ハ家業田義〔マ、〕ニ不離候様仕度義、然処御刑法帳
 御定、是迄ハ輕罪ハ追放被仰付、其上ハ鞭刑追放被仰付御
 定ニ御座候間、戸〔マ、〕ニ而御締相立かたき候節ハ、直ニ追方
 被仰付候間、流浪之者多相成、御国政之害ニ相成候節も御
 座候、依而已来之義、其罪之次第ニ寄、其所ニ難差置者は
 是迄追放被仰付候、一通懲候而其所ニ置候而も妨無之者ハ、
 仮令鞭刑ニ行候而も居村徘徊御免被仰付候様、沙汰之通、

寛政六年閏六月

六

〔欄外書入〕
 「過料上納向ノ沙汰」

一 過料錢上納之義、已来日限御定被仰付候ニ付、沙汰仕可申
 上旨被仰付、則左ニ申上候、
 一 過料錢上納之儀、已来錢高多少ニ不拘、日數六十日之内ニ
 上納仕候様被仰付候様、左候ハ、已来御沙汰ニ寄り過料錢
 上納被仰付候節、日數三十日之内急度上納仕候様、其度々
 御沙汰書ヘ書加ヘ可申上と奉存候、

一 過料錢上納之日數御定被仰付候上ハ、此末日限御定之外上
 納相滞候分は、御刑法帳之通、貧困にて上納難相成者ハ銅
 鉛山へ差遣、一日六拾文之積ヲ以、夫役被仰付候様、尤錢
 高三貫文迄之上納相滞候分ハ、日數三十日夫役被仰付候様、
 左候ハ、銅鉛山江差遣、夫役ニ召使方之義、山奉行江被仰
 付候様、尤其度々沙汰仕可申上と奉存候、

一 老幼廢疾之類、夫役ニも難相成者ハ、是迄御刑法帳之通其
 身牢舎之上、一年或は二年ニ而御容赦被仰付候様、尤老幼
 廢疾之類、過料錢相滞之分、牢舎之上、一年或ハ二年ニ而
 御用捨被仰付候様、御刑法帳本文之趣ハ、老幼廢疾之者罪
 科ニ相当候而も、鞭刑追放等ニ難被行故、贖ニ而過料錢上
 納被仰付、右上納難相成者は牢舎之上苦シ候儀理ニ御座候
 へとも、元来老幼廢疾之者ニ御座候間、已来之義ハ、錢高
 三貫文迄之過料上納相滞候分ハ、一日六十文之積を以、日數

七

慎被仰付候様、鞭刑拾八鞭所払贖拾貳貫文已上、死罪之贖四十貳貫文迄之過料上納相滞候分ハ、重罪之贖ニ御座候間、一日六十文之積ヲ以、日数牢舎之上御免被仰付候様、尤前書之通御定被仰付候而も、尤老幼廢疾之者ニ付、日数慎被仰付、日用統方難相成と歟、又ハ牢舎被仰付、助命無覺束類、其外子細御座候分ハ、時宜応し格段御憐愍之御沙汰被仰付候様、

一村方之者共、其村預御山ニ盜伐有之徒ハ相知不申、村方ヘ村方ヘ過料上納被仰付分、并漆木薪木等伐取願之通り被仰付伐取相改候節、過木等有之、村中江過料上納被仰付候類、以來村役引担之上、日数三十日之内急度上納仕候様被仰付、右日限過料上納相滞候分ハ、錢高多少ニ寄り、村役戸ノ之上、相滞候錢高一日六十文ノ積リを以、夫役人夫差出候様被仰付候様、尤右人夫使方之義ハ、其組中諸普請入用人夫之代ニ相立、其分年中郡方諸普請入用御渡錢之内差引、上納相立候様、尚又右之趣御代官引担嚴重ニ取扱仕候様被仰付候様、左候ハ、右取扱仕向之義ハ私共ニ而夫々可申付と奉存候、右之通被仰付候様、沙汰之通、

子九月

〔欄外書入〕

「徒刑ハ大赦之例」

一御刑法被行候者、鞭刑十八已上所払、尚又其所ニ難差置者ハ、鞭數ニ不拘、所払被仰付候、然処重罪ニ而徒刑被行候者共、年限之苦使相濟候得ハ、本所住居御免被仰付候処、輕罪科ニ而御追放被仰付候者共、御法会之節御免願申出候分ハ御沙汰ニ寄御免被仰付候得共、遠所ニ罷有、前非を悔本所ニ立歸度心懸之者、御法会等不存知、空數年月を送り候者も可有御座候哉、又ハ手筋無之流浪之身と成行候者茂可有之哉、何れ茂御国民一鉢之儀ニ御座候間、惡事有之節ハ懲メ、前非を改候節は御免被仰付候義、其罪之次第ニより、一年二年又三年ニ而御免被仰付、可然哉ニ奉存候、尤前書申上候通り、下ノ願不申出候而ハ難被及御沙汰ニ、尚又右之趣御触出被仰付候而ハ、御差障之義も難斗奉存候間、弥右之通被仰付候ハ、私共ニ而取調、年々十一月御沙汰^{〔免〕}之上御可被仰付候哉、

一是迄之通ニ而ハ甚不締ニ御座候間、是迄御追放被仰付候者共、御免無之内ハ、人別帳申出無御座候得共、以來ハ御追放被仰付候而茂、御領内ニ住居之分ハ、落付先寺社并町在村役ノ其旨斷申出、其段人別方江時々断候様、尤其者幾度住居改候而も、先々其度々に申出候様、尚又年々八月人

別御改之節、御追放者住居之訊、寺社并町在人別帳之外、別紙ヲ以書出候様被仰付候様、沙汰之通、

丑二月十二日

資 八

一 野火付之儀、前々御制禁之処、不得止事野火入御座候ニ付、安永十一年御締合之儀嚴重被仰付、其後も度々御触出し被仰付、過料錢上納等之儀も被仰付候得共、今以所々野火入候而、此節専ら諸木仕立方茂被仰出、在々諸木仕立段々御座候得共、野火を恐れ空山江諸木仕立方存念之程仕立も相成兼候旨相聞得候間、此度又々此上御締合可有之哉之旨、四奉行江沙汰申付候処、別紙之通申出ニ付、私共ニ而も沙汰仕申上候、右野火之義ハ、畢竟野火停止建札文言ニハ蔽刑と有之候得共、御刑法ニハ山野へ野火付候者三鞭之刑にて、輕刑ニ被行候間、下賤之者共一山江野火入、過分之諸木手取候義も有之ニ付、右位之輕刑ニ御座候間、右之御刑法不恐、野火之御制禁を相背候者も有之旨相聞得候間、御刑法帳之儀、右之通御定御座候得共、野火停止建札文言と御刑法帳と齟齬仕候様奉存候間、以来之義ハ、野火付候者見当搦捕申出候ハ、其在在町共其町其在々引廻之上十五鞭之刑ニ可被仰付哉、^(マ、)右候ハ、自然と相止可申哉と奉存候、右之

外四奉行之通可被仰付哉、沙汰仕、此段申上候已上、^(沙汰脱)

文化三寅年御用所御沙汰

九

一 伊勢參宮拔參之者於有之ハ、出奔帳外之者ニ被仰付、其子細ニ寄、公辺江御届申上、村役町役五軒組合之者共迄急度御咎可被仰付候、若於有之は名前年齢月日共早速申出候様、隱置脇於於相頭は、村役町役五軒組之者迄重キ御咎可被仰付旨、郡内惣触被仰付候様沙汰之通、其節御添書ニは、何儀ニ不寄、他領出之者は右之通被仰付候旨、大道寺宇左衛門殿被仰付候、

文化十四年正月十九日

※一〇

一 御刑法之表、盜貨百三拾貫文以上、死罪之料目ニ候得共、盜取候節ハ金価高下ニ寄、金高同様ニ而も死活ニ相掛不拘様ニ付、古來被御定被仰付候、俵子金給渡之割を以、金壹兩ハ八十目、米壹俵ハ拾五分之積ヲ以、已米右百三拾貫文ニ相当候様被仰付候、^(マ、)

同年十一月廿六日

一 一無宿者之儀、追放御止被仰付、鞭十八所払已上之刑相犯候

者并右已下之刑ニ而も盜及忒度候者、其外輕キ罪科ニ而も御取扱及三度ニ者は、乞食手江下方被仰付候様、沙汰之通、

文化十一戊年十一月

一一

一其罪科ニ寄、於居村端ニ御仕置被仰付候ハ、深く其処の懲ニ相成、御締相定候義も可有御座候、尤公儀ニ而斬罪已上之分も、其品ニ寄、其者之住所江差遣、御刑法被行候御例も有之、尚又御国表ニ而も、早き頃、居村端ニ而斬罪等被行候義、間々御座候間、以来徒刑以上之分も、時宜ニ隨ひ、於居村端ニ御仕置被仰付候様、沙汰之通、

丑九月四日

一二

一前々追放者之義、居村ニ而も、九浦町端ニ而も、鞭刑被行、何里四方追放と申義ハ、弘前町々何里四方と申事、但、居町居村之義ハ、右里数之外ニ而も、徘徊不相成候事、但、町奉行所格帳ニ有之、

一三

一無札之馬は勿論、凡而手段之馬之義ハ、已来拔馬ハ役ニ而差押申出候節ハ、為勵、右当人共江被下方之義、伺之通被仰付候、

文政九年九月二日

一四

一流木過木之義ハ、是迄御取上之上、右木品代錢ニ差積り、過料被仰付来候得共、凡而過木と申内ニ、過木と乍存伐取候者と、又ハ大勢之柚子組々ニ而沢入いたし、大都之白服ヲ以川流之節、沈木惡木等迄考量之上伐揃、惣津土場着之処ニ而竿入卷立候得は、自然過木有之分ハ、全ク手段木ニ無之、前条同様之沙汰難申上候間、此末右損之分ハ、過木願高之内、老分五厘迄ハ御定御役錢取立木品は格段御沙汰ヲ以被下置候様、尤平均老分五厘已上之分ハ、於津所度々不吟味之処ハ、過分之過木ニ相成候間、此上御用捨被仰付候而は、御山御ハニ相拘候間、右過木御取上被仰付候様、尚又隠木之分ハ多少ニ不抱御取上、右木品代錢ニ差積、過料被仰付候様、沙汰之通、

文政十亥年正月二日

一五

一四奉行申上候ハ、去十一月死刑之者沙汰仕申上候処、当二月ニ至り可被仰付旨被仰付、然ハ凡而死刑之分、春夏ニ被行候而は、天氣不勝ニも相成候趣、世俗前々共々申唱候、人氣ニも相拘候間、已来秋村納後、死刑被行候様被仰付度、

去春御内意申上如何可被仰付哉之義、又々御内意申上候処、
〔秋晚〕
当村納後、死刑被行候様被仰付、已来と申義ハ不被及御沙
汰旨、被仰付候、

寛政四年十一月五日

※一七

一公事訴訟、願事、詮義事、右六ヶ月ニ而不相濟分有之候ハ、
、何故不相濟、誰月番ニ而未相濟段、其度々六ヶ月にて書
付可被差出候、尤其已後相濟候ハ、其段相達候様、寅二
月被仰付候事、

※一八

他領者仕置之義ニ付、御聞役る根岸肥前守様江伺候
処、御附札左ニ、
覚

一領分中江他領者参り罪科有之節、其生国之領主江申遣候処、
先方ニ而は、出奔帳外之者ニ御座候由申越、取扱不申節ハ、
如何相心得可申哉、

御書面御領分中江他領者参罪科有之節、其生国之領主方
ハ、出奔帳外者之由申参候上ハ、他領引合無之、御領分
中引合迄之悪事ニ候ハ、
其罪科ニより御自分仕置被仰付候而可然と存候、

一領分之者出奔、又ハ親類久離等ニ而、其節御届申上候者も
品ニ寄、又々領主江引渡ニ相成候義も御座候哉、

御領分之者、出奔又ハ親類久離等にて奉行所江御届御座
候後、其当人悪事等有之候而も、元領主へ引渡ニ相成候
義ハ無之候、乍然領主之方ニ而受取度旨断有之候ハ、

品ニ寄、奉行所る御引渡可申義も可有御座候、
右之趣為心得、御内之伺置申度奉存候、已上、

文化七年四月 御名目

河野六郎

右御附札之内、○印其罪科ニ寄と申義ハ、其罪之輕重ニ隨
ひ御仕置等被仰付候而も不苦候、其節御伺等ニハ及不申義
ニ御座候、 御聞役

※一九

一凡而犯禁之物取押候義、御刑法帳之表、其懸合役筋之者ニ
無之候得は、其品ニ而取押候もの江被下候事、其役筋ニ而
取押候得は、押物多少ニ寄り御賞被下、其品は御取上被仰
付候、隨而是迄其筋之役筋取押候分ハ、其品入札払之上、
右代錢半分通御賞被下置罷在候、然処無極印木品并凡而之
取押物入札払之義相触候而も、早速ニ届人無之候得は、老
〔九〕
年若乃至式年三年と永々ニ相成、其品ハ朽損不用ニ相成、

尚又取押候者之勵合ニも不相成候間、已来何役ニ不拘、一統其品ニ而取押之者江被下置候様、沙汰之通、

文政元年八月廿一日

※一〇

一 盜袖いたし候者并過伐致候者共、木品費不申、其儘被取押候者と、木品費候者と、御片付方同様之筋ニは無之義と被思召候間、御沙汰仕置可申上旨、御演説ヲ以被仰付候ニ付、文化十四年四奉行沙汰之通被仰付候趣、左之通り盜賊律之内ニ、盜ニ忍入財物ヲ取り不申候得は鞭三と申ケ条御座候、隨而已来之処、盜袖ニ忍入木品伐返候而も木品老本も費不申者ハ、何程之木高ニ而も、本刑ろ一等ツ、相減、刑を加へ候様、若又伐木老本ニ而も費候者ハ是迄之通御片付被仰付候様、去ル酉年申上候処、其節沙汰之通被仰付候旨先頭申上候処、又々御演説（ナ、シ、）ヲ以被仰付候ニは、盜賊之刑と盜袖之刑と不都合ニ付、已来盜賊同様、木品費不費ニ不相拘義と被思召候ニ付、区々無之様、早速沙汰之上可申上旨、此度被仰付候ニ付、左ニ申上候、
一 盜袖いたし候者ハ、袖取之多少を以、御藏之財物を盜取候律を以、刑を可加事と御座候得は、盜ニ忍入、財物を盜取、右品取上候而も、一等相減不申、矢張本刑御片付ニ御座候、

左候得は、盜袖之もの木品取押ニ相成候而は、一等相減可申様無御座候間、木品費不費ニ不相拘、盜賊之御片付同様、本刑ニ被仰付候様、沙汰之通、

文政三年四月十八日

※一一

一 去十一月惣組御代官御山御締合申出ケ条之内、山下村々伐荒有之、当人不相知候節ハ、過料木植付被仰付罷有候得共、過料木老万本已上ニ相成候得は、植村場処も無之、尚又過料木植付候名目而已ニ付、已来老万本已上之過料之義ハ、外御刑法ニ被仰付度旨申出候間、其節山方御月懸兩奉行沙汰ニは、是迄諸山伐荒有之、当人不相知節、杉檜老本ニ付小杉ツ、植付被仰付罷在候得共、過料木之儀ハ木苗ろ仕立候間、早速之印も無之、適小杉植付候而も、其後不手入故盛木ニ相成候処は稀成る事ニ而、御締合不宜候間、已来錢過料ニ被仰付候様、尚御刑法ニ相抱候義ハ、三奉行沙汰被仰付度旨、去十二月兩奉行申上候処、当二月沙汰之通錢過料ニ被仰付罷有候、隨而是迄之御定は小杉老本五文ツ、御座候得共、已前と違ひ、當時は杉苗直段も引下候ニ付、此度小杉直段積、左ニ申上候、
一 小杉代錢、先年迄之処ハ老本ニ付五文ツ、ニ而御払被仰付

罷有候得共、近年樹芸御手入方被仰付候処、杉苗多有之ニ付、当時杉苗売本代銭式文ツ、ニ而御払被仰付罷有候間、過料小杉代銭、已来式文ツ、之積を以、銭過料ニ被仰付候様、尤是迄之処は過料木年限中植付不申候へ、小杉売本代之り五文ツ、過料上納之御定ニ御座候へとも、過料木代り過料錢上納被仰付候御例も無之候間、当時杉苗直段ヲ以、上納被仰付候様、其外ヶ条之義へ、別ニ斟酌可申上処無之候間、当二月両奉行沙汰之通被仰付候、元書付共相添差上、此段申上候以上、沙汰之通り、

文化三年七月十八日

※三二

一 盗袖手段之者有之候而も、買人無之候へ、自然隠伐相止可申ニ付、木品売買之者同刑ニ被行方之儀、委細先年被仰付罷有候間、評義仕候処、盗木買調候者御刑法嚴重ニ被定置候へ、自然盗袖相止候道理ニ而、御尤之御儀ニ御座候得共、段々評議仕候処、譬へハ盗当人木品大勢ニ売払候節へ、当人死罪代り徒刑ニも相当り候得は、其時に寄り、木品三拾人或ハ四拾人と小分ニ買取候節、木舞又ハ垂木杯之類ニ而五本六本ヲ買取候而も、其大勢不残当人同様死罪代り之徒刑ニ被行候義ニ御座候、然ハ御締合ハ此上も無御座

候得共、外之御片付、御刑法ニ至候而は差障之筋有之候間、何れ売買致候者共へ、是迄之通御刑法帳表ヲ以、盗品乍存買取候者御片付之律を以、御刑法被行候様沙汰仕、此段申上候已上、

御添書、当分之内寛政年中之通、

文政五年三月四日

※三三

一 御関所口入人之義へ、入切手紙并旅籠帳相渡候様、尤何用事有之何方誰方江罷越候誤相糺、入切手紙并旅籠帳へ相記相渡候様、先頃被仰付候通、尚又稼之者共、初而参候者共之義へ、稼所難相分、申出無之候へ、弥稼之ために参候者共ニ相違無之候へ、其誤一通入切手紙江相記、旅籠帳共相渡候様、尤々々参候者共之分へ、稼所宛所申出ヲ以、夫々書記相渡候様被仰付候様、沙汰之通、

文政五年三月五日

※三四

一 此度下磯通村々隠津出米等之義、吟味方并御役上納之品々青森江附賦方為吟味、同所米留役之内老人為試、境町橋際江別段居方被仰付候、然処下磯通江買越米并小間物あらもの其外平内領へ背負商人共右米留へ相断候様被仰付度旨、尚

又右品々ハ上磯村々同様裏印手形を以相通候様被仰付度旨
共、青森米留役_ル委細別紙之通、私共迄申出候ニ付、左ニ
申上候、下磯通差止候品々、

一米味噌水油醬油、何れも式斗已上、

但、右已下之分ハ、通手形無之候而も、日々米留所相通
候様、

一大豆小豆粟麥蕎麥、何れも^{〔袋〕}沓表已上、連多葉粉十連已上、

但、右以下之分ハ、通手形無之候而も、日々米所相通候
様、

右品々御差留類ニ付、私共表印之通手形を以相通候様、尤
米之義ハ式斗已下ニ而も、度々持賦、手段構敷相見得候ハ
、是又吟味致候様、

一下磯通村々野内町中店売入用ニ付、附通候木綿小間物荒物
小売酒水油糶等之類ハ、銘々家業方ニ付、御代官名印通帳
ヲ以相通候様、

一背負商人之義ハ、水油附木燈真箕菅笠串箆鍋ふた目籠之類
ハ、常々在方背負触壳勝手之品ニ付、此分ハ米留所日々相
通候様、

一雜菓子之儀ハ、神事并何敷人集等之節ハ、在方触壳御用捨
之品ニ付、右等之趣申出候ハ、相通候様、其外村村背負

商人之義御差留ニ付差留相通不申様、

一木綿小間物荒物之類ニ而、自分入用ニ付、青森_ル買調持参
之分ハ、其者之分限^{〔カ〕}心し、吟味之上相通し候様、

一民箸之類、御領内江入候義ハ格別、外江差出候義ハ、前以

御制禁ニ付、此末共右之通相心得候様、^{〔カ〕}榎木舞茂右同ニ相
心得候様、併与右榎木舞之分ハ申出ニ寄り相濟、私共_ル通
手形差出候部ハ、格別之義ニ御座候間、右之通相心得、取
候様被 仰付候様、

下磯_ル青森江入品々

一米并雜穀等ハ一切ニ差留ニ不及、相通し候様、

一絹本綿小間物荒もの多葉粉蠟鉄之類、凡而御役物之義ハ、
野内口御役上納相濟と同所町奉行_ル送書差出し、右送書之
表改相通候様、

右之通相通候様、左候ハ、境町_ル下磯通飯料不足ニ而青森
表_ル買喰村々之分ハ、是迄ハ御代官名印之通り帳を以相通
り罷有候得共、已來前書之通被仰付候ニ付、村高人別を以
差積り、飯料買下願申出候様、郡奉行江被 仰付候様、野
内口_ル入品ニ送書差出候義ハ、同所町奉行江被 仰付候様、
米留役ニ夫々私共_ル可申通と奉存候、此段申上候已上、

文化九壬申年九月

勘定奉行

家屋敷并田畑引当之義、已來町役村役聞届ケ、印形を受取引致候義并三貫目已上ハ仲買之者取扱致し候様、其外田畑讓渡之儀、一抱讓渡之分ハ前々御代官聞届ケ未印致候義、文政八酉年委敷御触出被 仰付候処に、今心得違し重渡等有之、尤引当田畑之義ハ別而重入多、村役限之聞届ケニ而ハ御締合ニ相抱候間、已來讓渡同様、御代官役所江差出、元帳江反別引合之上、手代印形之点羽ヲ受候様、若点羽無之証文ニ而引当等ニ受取候分ハ、証拠ニハ不被仰付候、尚又前書酉年御触出後、讓渡并引当等ニ差置候田畑等、手代点羽受不申分も多有之旨相聞得、不埒ニ候得共、此度は御用捨被 仰付候間、是迄取置候証文、此度御代官役所へ差出、改而手代印形之点羽ヲ受候様、若右点羽不受分ハ如何様之義有之候共、御取上不被仰付候、此旨可被申触候已上、

文政十三寅年九月

右之通、毛内有右衛門殿被 仰付候已上、

九月廿八日

- 一 公儀之船は不及申、諸廻船共遭難風時は助船を出し、不破損様ニ成程可入積事、
- 一 船破損之時、其所近キ浦之者入積荷物船具等可取揚之処、其揚荷物之内、浮荷物ハ式十分一、沈荷物ハ拾分一、川船ハ浮荷物三十分一、沈荷物ハ式十分一、取上者ニ可遣事、
- 一 沖ニ而荷物はぬる時は、着船之湊ニおゐて其所之代官庄屋出會、遂穿鑿、船ニ相残荷物船具等之分可出証文事、
- 附、船頭浦々之者申合、荷物盜取之、はねたるよし偽申出ニおゐてハ後日ニ聞といふとも、船頭は勿論、申合輩悉死罪たるへく事、
- 一 湊ニ長船を懸鞆あらハ、其子細を所之者ニ相尋、日和次第早く出船いたさすへし、其上ニも令難波者、何方之船と承届之、其浦之地頭代官江急度可申達事、
- 一 御城米廻之刻、船具水主不足之悪船ニ不可積之、并日和能節、於船破損は、船主沖之船頭可為曲事、惣而理不尽之義申懸之、又ハ私曲於有之ハ、可申出之、縦雖為日教其科をゆるし御褒美可被下之、且又あたを不成候様可被仰付事、
- 一 自然寄船并荷物流来るにおゐてハ揚置へし、半年過迄荷主於無之は、揚置候鞆可取之、若右之日教過、荷主出来たりといふとも不可返之、雖然ハ所之地頭代官差函を受へき事、

一博突窓而賭之諸勝負弥堅可為停止事、

右之条々可相守、此旨を背、若悪事仕ニおゐてハ、申出ヘシ、急度御褒美可被下之、科人は罪之輕重ニ隨ヒ可為御沙汰事、

寛文七年閏二月十八日 奉行

正保二壬辰年十月九日 大御目付 横田備中守

様御渡書付之趣、左ニ、

此度諸國浦々の湊高札御案文被仰出候、只今迄高札有之処ハ、右之御文言札ニ認メ、其際ニ可被相建候、左候ハ、何方ニ建候段書付、銘々に兩人方江可被差出候、高札間遠之所も此書付を以急度相守様、入念可被申付候、別御案文写遣候已上、

十月

横田備中守

大久保大隅守

前々々浦々高札相建

公儀之船ハ不及申、諸廻船共猥成義無之様ニ被 仰付候処、遭難風候節も所之者共、船之助ニハ不相成、却而被船候様ニ致かけて荷物刻さや、或ハ上乘船頭と申合、不法之義共有之様ニ相聞得、不屈ニ付、御領ハ御代官、私領地頭々常々遂吟味、毛頭不埒不仕様ニ急度可被申付候、若此上不埒

之儀於有之は、後日相聞得候共、其者ハいふに不及、所之者迄可被行重科、其上其所之御代官地頭迄可為越度事、

一御城米船近年破船多候ニ付、今般諸事相改、別而大切可仕旨申渡、船足之義も深不入様ニ、大坂ハ大坂奉行、其国々の船は其所支配之御代官、船足定之所ニ極印を打、船頭水主之人數ヲ不減少様、急度申付、令運漕管ニ候、仍而湊江寄候船之分ハ、船頭水主并船足之極印之通無相違哉、送状ニ引合、急度相改、帳面記置、上乘船頭印形致せ、右書物其処江留置、御領ハ御代官、私領ハ地頭江差出之、御代官并地頭々御勘定奉行迄可被差出候、且又極印ハ船足深く入候船有之、過ニ積候俵数委細改之、御城米之外、船頭私之運賃を取、他之米役或ハ商売之荷物等積入候歟、又ハ水主人數定之内其減少候もの、船ニ積入候荷物ハ其所ニ取揚置、水主人數不足之分ハ其所ニて慥成水主を雇せ為致出船、其上にて右之訳早速御勘定奉行江可訴事、

一破船有之節、浦々々もの出會、荷物船具等取揚候刻、盜取候歟、又ハ不屈之仕方有之ハ、船頭ハ不隱置有舛早速可訴之事、

右之条々急度可相守、若違犯之輩於有之は詮義之上可被行罪科、不吟味之子細も候ハ、其所支配之御代官又ハ地頭迄

可為越度もの也、

辰八月

資 ※二七

古来九浦江被 仰付候写

関所御印之定

- 一 御家中衆登候節、其仁下書ニ而出御印可出之、但ッ分限ニ過候持杯(マ)ニ而、如何と存候義ハ、其下書を以、可得差凶事、
- 一 牽馬小荷駄負致之義、如御定、知行高ニ応し可出之、
- 一 御家中衆家来用所有之候而出候節ハ、其主人の下書にて可出之、

- 一 寺社方ハ其惣録之下書にて可出之、若出家杯ニ不似合持道具有之ハ、其惣録之方江断致、不紛義ニ候ハ、御印可有之、
- 一 寺社召使之者、同断、
- 一 女之出御印停止之事、

但ッ奉行所々廻状にて出候義、格別之事、

右之通可相勤もの也

寛文六年二月廿八日

覚

※ 一向後他領る繩掛候もの之義ハ不及申、縦繩不懸ニ召連候者

ニても、早速受取申間敷之、其子細伺候ハ、可為差凶事、
 一 惣而他領る御当領之山、或ハ脇道を参候紛しき者、あやしき者杯と見当り候ハ、た、とらへ置候共、慥成証拠も無之ニ繩懸申間敷事、

右之通急度可被申渡候、

天和二壬戌年八月十日

一 礎ケ関、大間越、野内、右三ヶ所御関所江左之通板札建候様被仰付之、

覚

諸勸進、免許之外、堅入申満しきもの也、

卯九月 日

右は正徳元年九月十日

※

一 各支配所、古来る諸勸進之者入不申候建札有之処、近年狼ニ罷成、六十六部初諸勸進之もの不吟味ニ而御領分ニ相通候、向後建札を守り、諸勸進之者入申間敷事、

右之趣相守候様、九浦町奉行江被仰付之、

寶曆三年六月朔日

※ 一武具道具之事

一馬、牛 一米、大豆、雜穀 一金、銀、銅、鉄、唐金

一錫、鉛、錢 一綿并紅花 一漆、皮類

一酒、糝、味噌 一鷹、麻糸 一蠟油、藍

一鳥紙 一昆布 一

右合三十ヶ条を如前々堅相留可申候、但、切手有之おゐてハ念入改通可申もの也、

一木綿、新物、古手

一悪銭、商人、金穿

一出家、入道、何人よらず不審なるもの入申間敷候、

但、其もの申分有之候ハ、奉行江相断可申事、

右之条々、他国ハ一切入申間敷候、

明曆元年五月十二日

※ 一薦僧 一六十六部 一出所姓名不正他国浪人

一諸勧進

右躰之者御領内江入込候ハ、早速追返之義、明和八年卯

四月十六日御触出之趣は、旅人往来御締合之留帳、文化三

年寅八月之留記ニ有之候ニ付略之、

※ 二八

弘前藩の刑法典

一凡而犯禁之物取押候得は、何役ニ寄す、一統其品ニ而取押

候者江被下置候様、伺相濟候得共、山方役人廻先犯禁之木

品取押候得は、其品入札払被 仰付、被下置候事、尤向々

役人出会见分等ニて過木等取押候節、右出会山方役人入加

候得は、前段同様被下置候事、

文政元寅年八月

二九

一諸手足輕中村幸左衛門無調法之義有之、永之御暇追放被

仰付候節、同人亀甲町ニ所持之家屋敷御取上之様ニ町役之

者存し願申出候処、同人中町ニ所持之明屋敷ハ御取上ニ相

成、町方ニ持所之分ハ御構無之旨、尤已来袴役之者町家住

居之家屋敷ハ御構無之、無袴之分ハ罪ニより御沙汰之事、

巳五月

三〇

一寛政八辰年十月、土手町三国屋与兵衛ハ出火ニ而同人家部

御印札焼失ニ付、代り御印札願出候節、御定過料銀壹枚上

納之上、代り御印札渡方可被仰付義、人別調役席附紙ニ而

申上候処、常躰ニ而紛失之分ハ過料上納可被致答、如此急

速之事ニ而焼失之分ハ格別之事故、過料ニ不及旨、御用番

伴才助被申、過料なしに相濟候事、

一 御印札紛失、過料銀壹枚上納之上、日數五日戸^レ、墨付候
而も同様、

資

御切手紙紛失、過料銀壹枚上納、墨付候而も同様、勘定奉
行裏印手形紛失、過料錢銀五両上納、

※三二

一 是迄役筋にて手段米木附參候者見當、馬共取押候得は、荷
品は被下置、馬ハ入札払之上、代錢上納被仰付罷有候得共、
馬共被下置候ハ、尚以御締合宜相成可申奉存候間、已來
馬之義は入札払之上、右代錢不殘被下置候様、尤番所前坏
ニ而取押之分ハ、代錢半分通り被下置候様、被 仰付候様、
沙汰之通、

文化十四年三月

※三三

一 借屋之者博奕之義いたし候節ハ、大家之五軒組合戸^レニ而
相濟候例有之候得共、隱商売之節、大家并五軒組合る過料
上納被 仰付候、然ハ博奕、隱商売、盗袖、隱津出之類連
座之過料上納之筈之処、隱商売斗、大家并五軒組合る過料
上納被 仰付候義、相当不申ニ付、右之趣、吉沢庄大夫殿
江相伺候処、一統ニいたし可然旨、御演話^(マ)ニ付、下土手町

木屋喜八右衛門借屋日雇孫兵衛、博奕之宿致候節、大家^ノ
専貫八百文、大屋之五軒組合る三貫六百文、町役は五日戸
^レ被仰付候様申上候処、沙汰之通被 仰付候、已來常例ニ
相成候事、

享和元酉四月

※三四

一 隱田畑、隱津出、盗袖、博奕之宿、隱商売之義ハ、五軒
組合連座ニ可及ケ条ニ付、右五ヶ条犯候分ハ村役、町役五
日之戸^レ、前々^ノ被 仰付來候、尤村町役取扱、吟味、不
吟味ニ寄り、戸^レ之日數加候義も有之、又ハ輕き事ハ御同
一通之義、時宜御沙汰次第之事、

※三五

一 隱津出いたし候者、鞭十五所払、外ヶ浜四ヶ組御構之義、
前々^ノ例有之候得共、自分隱津出之宿被頼候者御片付之例
無之ニ付、油川村伊惣次と申者、同村権之助被頼、宿いた
し候節、本人同罪、御罪相濟候事^(マ)

※三六

一 隱津出手段米乍存壳払候者共御片付之義、御刑法帳ニはケ
条無之、御刑法帳、御触ニ背候者重キハ日數三十日之御定
ニ付、左関村ニ而隱津出手段之節、乍存壳払候者共御片付、

※三七

前書之通日数三十日ツ、戸^ハ申上候処、御裏書ニは、戸^ハ之者共申出之通可被仰付候得共、耕作最中之時節ニ候間、格段之御沙汰ヲ以、十日ツ、戸^ハ被 仰付候、

享和二年二月

一 隠津出いたし候者御片付之義、御定法之通、鞭十五被行、其所ニ差置候而は、又々隠津出手段取巧候御沙汰ニ而、所払之上外ヶ浜四ヶ組住居御構被 仰付候様、申上罷有候得共、左候而は、浦々へ住居勝手次第之様心得候而は、却而差障ニ相成候ニ付、後鴻組前田村市五郎御片付之節、鞭刑十五鞭被行、所払之上、外ヶ浜浦々并四ヶ組住居御構被 仰付候様申上相済、已来右之通相済可申事、尚又西浜茂右之心得にて取扱可有之事、

寛政十酉年二月

※三八

一 隠津出手段見当、取押ニ相成候節、夜分环ニ而逃去人元相知不申節ハ、右押米御片付被 仰付候斗ニ而、別ニ其場所御咎不被 仰付候得共、已来右躰人元相知不申候而茂、全く其所之村役、町役江も御咎可被 仰付候間、心得違之者無之様、能々教道いたし御^ハ相立候様、

一 右当人相知候節、其村役、町役ハ勿論、当人之五軒組合之者共迄、重キ御咎可被仰付候、

一 地船は勿論之義、他所船ニ而も其湊江入津之節ハ、凡而隠津出厳重御制禁之趣、宿問屋共ニテ船手江能々申聞、心得違不致候様、仮令其隠荷物ハ外宿より積出候而も、宿問屋ニ而は存不申儀は無之筈ニ付、已来船手之者心得違等有之候節ハ、宿問屋茂重キ御呵可被仰付候間、能々相心得候様、不^ハ之義無之候様、

文政七年十月

一 点羽、宿問屋其手段之情不存候得は、鞭ニハ難被行、随而弐百表已上ハ其宿問屋戸^ハ三十日、百表已上ハ戸^ハ廿日、百表已下ハ戸^ハ十五日限ニ如何、

※三九

一 其罪疑敷相聞得、番人附置候者、取逃候番人、已来不覚一通之処ヲ以、罪人重相聞へ御詮義中之者取逃候番人ハ鞭三、輕キハ戸^ハ等被仰付候様、尤罪人相對ニテ取逃候と歟、又ハ賄賂等申受取逃候歟、外ニ子細御座候分ハ、時宜御沙汰被仰付候様、伺相済、 享和二年六月

※四〇

一 他領者御印紙紛失之節、問屋ニ而旅人江中含メ方不行届キ

料 之趣を以、問屋五日戸^レ之事

※四 山所伐荒抜向

資

- 一 山中伐荒有之、科人相知不申節ハ、山下村江為過料、檜、杉、栲本の代り小杉百本ツ、雜木、栲本の代り小杉五十本ツ、植付させ可申事、但、植付之年限、伐荒之多少ニ寄り、三ヶ年^ノ六七年迄植付させ可申事、
- 一 過料木植付被 仰付年限過、植付不申節ハ、植残り木高を以、過料上納可申付事、但、杉、檜、栲本ニ付五文、雜木、栲本ニ付式文半積を以、過料上納致させ可申事、
- 一 無極印木柄売買之者、錢高式拾貫文已下拾貫文以上ニ相当り候分ハ、戸^レ三十日、拾貫文已下ニ相当候分ハ、戸^レ廿日、無極印木品乍存預り置候者、前書売買致候者之刑^ノ一等輕く可申付事、
- 一 山中伐荒有之、当人不知候節、山下村江植付過料被仰付候節、村役不吟味ニ付、伐荒之多少ニ寄り、戸^レ被仰付候事、尤事輕キハ御代官ニテ呵可申事、
- 一 凡而木柄代錢積之義ハ、古來の御定直段を以差積可申事、但、雜木ハ御定直段^ノ割半下ケ、尤桂、楓、栗、檜等ハ、檜御定直段同様之事、
- 一 寺社境内ニ伐荒有之節、御^レ合之義、御用所江御沙汰向申

上候事、尤輕キ寺社之分ハ、禁足等之義、沙汰之上申上候事、

一 寺社境内ニ伐荒有之、代り木植付之義、代り木、栲本之代り小杉拾本植付させ可申事、

一 是迄寺社仕立抱山ニ而、当人不知、伐荒有之節、材木之義ハ、御極印御打入之上被下置來候、随而久渡寺境内山ニ而、何れ之者之所為ニ有之候哉、伐荒有之旨、申出有之候間、先例之通木品被下方之義申上候処、甚沙汰緩之旨、御演説ニ而御返被 仰付候ニ付、其節^ノ伐荒木品之義ハ御取上之上、右財木杉、栲本代り拾本ツ、植付候様申上候、仕立抱山之義ハ、御役錢上納之義ニ付、木品御取上之上、抱山主并村役、御代官ニ而御叱之義申上候、已來為心得記置、文化三寅年四月之事也、

- 一 炭釜隱燒之者見当り候節ハ、有釜御取上之上、釜、栲枚ニ付過料錢三拾目上納之事、
- 一 諸山ニ皮剝木有之節、生木伐荒同様之事、
- 一 自分抱山之木品、申立も無之、我儘ニ伐取候節ハ、伐木之多少ニ寄り、抱主戸^レ申付候事、
- 一 御取上品之義、最寄在町江入札払之義可申上事、尤御用分ニ引入候義ハ、時宜御沙汰之事、
- 一 押木柄入札払之義、是迄近郷^ノより之者江入札払申上來候処、

已来山下村江相払不申、外村江相払候様被 仰付候、
文化八年七月

一 黒石領之者、過料取上候義、類例相見得不申候得共、黒石
表ニ計リ、過料不取上候而ハ、御境木并御当領之木品伐取
候御、相立不申ニ付、過料錢半分ツ、上納方之義、沙汰之
通被 仰付候、 文化八年閏二月

※四二 野火入過料定

一 壹万坪已下之焼失ハ、過料錢、〔マ、以下同〕百性耆軒、拾五文、〔マ、〕高高耆
軒、拾文、
一 壹万坪已上貳万坪迄、百性耆軒、三拾文、高無耆軒、拾五
文、
一 貳万已上三万坪迄、百性耆軒、三拾五文ツ、高無耆軒、
貳拾文ツ、
一 三万坪已上四万坪迄、百性耆軒、四拾文、高無耆軒、貳拾
五文、
一 四万坪、五万坪迄、百性耆軒、四拾五文、高無耆軒、三拾
文、
一 五万坪已上、百性耆軒、五拾文、高無耆軒、三拾五文、
一 焼失貳万坪已上、野火にても、過料之上、村役戸、

※四三 内済扱向之事

一 野火隠置、山役人ニ被見出分ハ、少分たり共、過料之上、
村役戸、但、五人組ハ百性ニ双倍之過料、
一 窓而小柴たり共、木立之野火ハ、過料之上、村役戸、
一 自分抱合之野火ハ、不及過料、抱主戸、
一 千坪已下荒田畑と賦、又ハ空地之分ハ、村役、申出候得ハ、
村方過料御免之上、村役戸、
一 凡而村役戸之義ハ、不残戸、過料可申付事、
一 凡而米錢取引并喧嘩打擲揉合等之義ニ付、御裁許相願候内
ニ、双方共和談致、内済ニ取究候節、最初申出書付御下ケ
方之義申出候得ハ、吟味致、申出書付、是上御下ケ被 仰
付罷有候、然処、去々年大罌組三ツ目内、居士而村山論之
義ニ付、村方之者共互ニ打擲致、右ニ付御仕分之義申出罷
有候内、村方、山論之義ハ、双方和談致、尚又打擲之疵療
治料差遣シ、内済ニ相成候間、最初申出候書付御下ケ之儀
申出候、然処、其節被 仰付候趣ニハ、凡而下、御裁許之
義相願候ハ、右御沙汰中内済向申出候ハ、何れ内済致
候様被 仰付、尤前書而村之者共、評定所白洲江呼上、御用
人衆御出座、三奉行ハ勿論、人別調役出席之上、同組御代
官罷出、内済申出之趣始末吟味致シ、当人は勿論、親類共

る差出候証文江印形致セ、其上ニ而、申出書付御下ケ被仰付候、然処、其後雲州東崎屋十兵衛沖船頭武兵衛と申者、鑓ヶ浜三國屋^{〔カ〕}弥太郎と、荷物代金取引之義ニ付、是又内済ニ相成候間、書付御下ケ之義申出、其節取扱向ハ、前書内村内済同様取扱候得共、其節ハ御用人衆御出座無御座候、然ハ三ツ目内、居士兩村杯之如ク、多年御取扱相成候類、并他領旅人取引揉合等ハ、右牀内済向ハ^{〔カ〕}嚴重被仰付候ハ、御締合も格別宜義と奉存候得共、左迄之義ニ無之御領内取引、并其外一通之揉合等迄、不殘前書之振合ニ被仰付候而ハ、御扱重ニ茂相成、第一、内済之道品々ニ寄り差塞り候事にも至り可申哉、其訳ハ初発之処ハ双方聡与理非分明之沙汰ニは無之、互ニ理屈之様ニ相心得、揉合候得共、与得考候処、始而理非相弁、心得違を悔、内済之義願出候義ニ御座候、然るを前書之如ク、当人共ハ勿論、親類并村役、町役迄も評定所白砂江呼上、内済向相違無之義を相糺候上ニ而、右差出候証文江印形致セ候て、内済被仰付候義ニ而ハ、右之重キ御取扱ニ相成候義を、却而恐怖致シ、揉合之双方之内、一方ハ仮令和談之義願入候而も、一方ハ其揉合ニおゐて道理なる方杯ハ、白砂江呼出候事相恐れ、自分ハ越度無之故、白砂江罷出候ハ、内済不相成義ハ却而

勝手ニ付、内済向聞へ不申茂多分可有之、尚又親類方并村役杯も品ニ寄り、白砂江罷出候義相嫌ひ、内済向中就之沙汰心に入間敷、尚又一通り之揉合ハ仮令白砂江呼出申共、^{〔カ〕}当人共并親類共印形証文を向々支配頭ニ而吟味致、差出候処ニ而内済被仰付候ハ、御扱重ニ茂相成不申、御締合とても破候筋も有之間敷奉存候、

右之通被仰付候趣、尤前書三ツ目内、居士兩村并其外他領懸合之揉合等ニ而一通ならざる義ハ、前書先頃被仰付候通、内済嚴重被仰付候様、御用所点羽

○此ヶ条内済評定ニ御用人出席之筋無之、町ハ町奉行限、在方ハ郡奉行限、其外之廉茂右ニ準し吟味之上、内済相懸可然義ハ其通ニ申付宜候、先達而八郎兵衛出席之義ハ、内済扱向も始而之義、殊ニ三奉行評定席江罷出候様、兼而被仰付有之ニ付、為差引出席之事ニ候、入組候義ハ三奉行評定之上、念入可被取斗候事、

○此ヶ条初発願出之節、町ハ町役、在方ハ庄屋江申出候上、奉行へ相達し、其上内済願出候ハ、当人親類とも印形証文中にて締合不宜候間、矢張町ハ町役、在ハ庄屋之印形之上、願書相下ケ候様、

六月

一内濟之義ハ、凡而下ル御扱筋相願候分ハ、其意ニ任セ、双方和談致候得ハ、罪人も不足ニ相成候ニ付、申出ニ随ひ内濟致候様、乍去上ル書拔等ニ而詮義ニ相成居候分ハ、内濟難被仰付旨、文政四巳年七月、八郎兵衛殿ヲ御演説を以被仰付候、

※四四

修驗宗脱衣之義ニ付、大行院申出、左ニ、

此度中村監物殿被申談候ハ、御末派之内、法職不似合不埒有之、御領主方ル御咎ニ而追院等被仰付候節、御申渡何との軽重ニ寄り、還俗之上追院申付候旨被仰渡無之哉、其御尋ニ付、是迄左様之義被仰渡無之旨、答申候処、自然左様之節ハ、聞談所江其院出席可致候間、其院ル申渡、袈裟取押候上、科の軽重ニ随ひ、如何鉢ニ御申付被成候而も、還俗之義ハ御役方被仰渡無之様、兼而御咄申上候様、尚又不時ニ袈裟衣之儘ニ而繩打候義も可有之候間、是ハ不苦候、其者入牢等被仰付候ハ、御役方ル其院江被仰付、還俗為申渡可然と申事ニ御座候、依之恐多申上様奉存候得共、已来右鉢之者、還俗之御文言御除被成下、拙寺ル還俗申付候様被仰付被下置度、此段兼而奉伺候已上、

寛政六年十一月

大行院

※四五

現責之事

一揚屋入之内、工藤元右衛門子仲三郎義、段々口聞詮義仕候得共、申分相分り不申間、拷問責可申付候得共、幼若之者ニ付、拷問茂相成申間敷候間、現責之上、問方可申付旨、伺之通、

文化七年四月

※四六

馬盜評議之事

赤石組館村万慶事

久七

此者義、去々八月、岩木嵩湯元ニ而、赤田組鶴田村勘三郎建馬式疋、岩端村要之、兩人ニ而盜取、秋田表江引越致候処、能代馬宿ニ而被追懸、馬被取返候趣被及御聞、入牢之上、再応御詮義之處、要之兩人ニ而勘三郎建馬式疋嵩湯元ニ而盜取、大間越間道相廻り、秋田能代ニ踞り罷有候処、勘三郎下男半次郎、舞戸村弥八郎兩人尋方ニ參り被見当、馬相返、内濟頼合之義相違無御座旨、及白状ニ候、随而右刑、御刑法帳之表、

馬を盜取売買致候者、斬罪、

右之通御座候、然ハ馬を盜取候者之刑、首徒之差別并盜取候馬之多少、其子細ニ寄り輕重之差別無御座候、尤馬を正

ニ盗んとして被召捕候と歟、又ハ盜取候否や馬取返され候
トカニ御座候ハ、刑ニ輕重之御沙汰向も可有御座哉、要
之久七事、馬盜取可申ため相巧、岩木嵩湯元江參、勘三郎
馬盜取、問道相廻り、既ニ他領江首尾好引越、緩々止宿致
罷有候を、追人相返候義ニ御座候ハ、本刑可相減子細無
御座様奉存候、

但、強盜之律を以参考仕候而も、左ニ相当申候、追剝強
盜之者既ニ行候ハ、財物を取り不申共、徒一年半鞭三
十、既ニ財物を取候得ハ、同類不殘、磔、右を馬盜人ニ
比ヘ候得ハ、既ニ馬を盜取可申手段行候ハ、馬を盜取
不申候共、徒刑、既ニ馬を盜取候得ハ、斬罪といふ義理
相当り可申奉存候、左候ハ、左候ハ、強盜之律ニ比ヘ候
而も、本刑可相減子細無御座様奉存候、

御 刑 法 方

右之通相伺、右書付御願役江御相談ニ相廻候^{〔九〕}處、寺社奉行
ガ、御刑帳ニ馬を盜取売買致候得ハ、斬罪と有、他領ニ而被
取返候而も、いまた売買ニ及不申候、刑相当可然哉之旨申
參り、安永四未年御定御刑法帳詮義之處、

一牛馬を盜出、他領江売買、又ハ他領之惡物引入相對致、手
引致候者、獄門、

一牛馬を盜出、御領内ニ而も売買候者、斬罪、

右之通にて、他領へ引越候得ハ、斬罪難遁ニ付、又々右之
趣御相談之處、當時御用への御刑法帳相用候ニ付、旧典ニ
不抱沙汰致可然旨申參り、又々委細及御相談ニ候得共、寺
社奉行中御承知無之候、然處高屋吾助殿ガ被仰付候ニハ、
當時之御刑法帳ハ、伴才助引担沙汰取究候義ニ付、人別調
役老人御同人江罷出問合可申旨被申ニ付、長谷川猷吉、才
助殿江罷出、委細問合候處、當時之御刑法帳之文茂簡易ニ
致候ハ共、安永年中御定之御刑法ニ別ニ相替義無之、馬盜
人之義ハ、其節色々論義も有之候得共、古來ガ御ガ合嚴重ニ
相定被置候事故、明律等之格ニ茂難相成、古來之獄門を斬
罪と相定候迄ニ而、別ニ子細無之候、尚又此度之馬盜人既
ニ関門を越候得ハ、売買之刑顯然ニ可有之旨被申ニ付、右
之趣罷歸り夫々相違候處、四奉行中御相談之上、死罪ニ取
究、沙汰申上候處、御用所御添書ニ、死罪ニ被行候得共、
当年兩度之御法会等も有之候ニ付、格段以御憐愍永牢被仰
付之、

享和三年八月

※四七

盜賊御片付評議

中嶋村

又 助

此者義、去十二月、浪岡御藏之内江忍入、撰錢貳百六拾匁盜取、御藏之窓落置候由、然処翌日御藏開き候処、錢箱痛罷有候ニ付、右錢詮義之處、窓下ニ有之、又助一重俵の内出候由、右御片付、左ニ盜取候錢高貳百六拾匁、貫錢ニ直シ拾五貫六百文、此刑、

御藏之財物を盜取候者、拾五貫文已上、鞭十五、又盜賊之律ニ、

盜ニ忍入、財物を取不申候得ハ、鞭三、入墨許之、但、人之土藏を破り、或ハ盜ニ忍入候次第ニより、大盜ニ紛無之候ハ、財物ニ不抱、入墨鞭三十、

右之通御座候、然ニ又助義、撰錢盜取為可申忍入、大盜之手段共相聞得不申候得共、御藏之内江忍入、老夜も罷有、右躰手段取巧之義、一時ニ財物盜取候者とハ、儀理格別ニ而、同類等有之、右躰手段取巧、御藏内ニ忍罷在、拼錢多く有之節ハ、何程も取賦可申義も難斗ニ付、有錢拾五貫六百文を以刑を加へ候義、儀理不穩候様奉存候、随而忍入候次第、大盜之律を以鞭三十被行候様被 仰付候哉、

右之趣一通り申上候処、鞭三十二四奉行中沙汰取究申上候通、相濟、

文化元子年二月

※四八

隠家業過料定

一木綿古手

但、脊負商共、

一室屋

一米金仲買

右三ヶ条、品物取押之上、過料錢百匁、五軒組合四軒

百匁、

一荒物小間物

但、脊負商共、

一古道具、古木柄、古鉄物

但、右同断、

右式ヶ条、品物取押之上、過料錢七拾式匁、五軒組合四軒

軒七拾五匁、

一壳壳

一小間物

一穀物

一取壳

但、隠仲買共、

一豆腐屋

一麴類菓子

但、脊負共、

料

一 小売酢、醬油、塩、味噌 但、右同断、

右七ヶ条、品物取押之上、過料錢五拾匁、五軒組合四軒
の五拾匁、

一 魚触売

一 干着

但、脊負売共、

一 煮売

右三ヶ条、品物取押之上、過料錢三拾匁、五軒組合四軒
の三拾匁、

一 木挽、大工、鍛冶、惣而百工之属

右隠職之分、為過料、道具取押之上、戸、五軒組合四
軒の過料三拾匁、

右条々相犯候者於有之ハ、罪之輕重不抱、町役、村役戸、

丑六月

但、五軒組合之義、在方ハ庄屋、町方ハ名主斗差除キ、
月行事、五人組といへとも、以来ハ五軒組合ニ結び候様、
尚又町末ニ至り割余り等ニ而、組合甲乙有之分ハ、都合
不拘、百匁之過料ハ組合老軒の廿五匁ツ、差出候様、借
屋之者、隠し候商売ハ、仮令ハ百匁之過料ハ、大家の五
拾匁、借屋之者も百匁、大家の五軒組合老軒の式拾五匁
ツ、差出候様、老軒ニ而兩人隠家業致候ハ、五軒組合

ニ而も、両人之分ツ、過料差出候様、
寅八月被 仰付候、

「安永律」につぐ、津軽家弘前藩の第二の刑法典たる、いわゆる「寛政律」については、前稿で述べたように、田部芳・蝦名庸一⁽¹⁵⁾両氏により、その全文は学界に紹介されている。したがって屋上屋を架する要はないのであるが、あえて主な写本の紹介を、前稿で示した京大本に引続いて、しばらく試みたい。

しいて理由をあげれば、「安永律」のテキストは前述のように、目下の所、弘前市立弘前図書館所蔵の孤本のみ知られるのに対し、「寛政律」は同館所蔵の諸本、青森県立図書館所蔵本、弘前大学付属図書館所蔵本および京都大学法学部所蔵本など多数の写本がみられる。蝦名氏の作業がこれらのうち比較的良質な諸本⁽¹⁶⁾を基に「寛政律」の定本復原を試みられたことも想起しておきたい。したがって田部氏の作業も念頭において、諸写本の紹介は、単なるテキスト決定および伝写関係の追究のみならず、「寛政律」をめぐる法技術にとどまらぬ法意識・法現象の解明への一助とならぬかとも秘かに期待する。

ことに京大本にも見られたように、「寛政律」本文の後に、「附」として関連法令や判例を加える写本もあり、しかもその内容は一様ではない。あるいは、「寛政律」そのものの本条にも、条文の語句の異同(単なる伝写の誤りでない)や、条文の配列順の異同もみられる。いずれにせよ、これらの具体的内容を、し

ばらく大方の前に供してみたい。

初めに紹介する弘前市立弘前図書館所蔵の『御刑法書之写』は、故岩見常三郎氏の収集になる岩見文庫の一本である。同館の『目録』⁽¹⁷⁾によれば、

御刑法書之写

G K 三二二・五一二五

写 一冊 半紙 和

前半は寛政律

後半は御刑法牒付として四五項目の付記がある

と示す。その体裁は、縦二四・六センチ、横一七・一センチで、表と裏に、亀甲内に菊の押型小紋を散らす薄青地の厚紙を緑糸で四カ所綴じつけた表紙を付け、本文は袋綴八〇丁から成る。表紙の題箋に「御刑法書之写 全」と記し、右肩に館の請求記号票とその下に分類票「岩見、法度定書、一八、一」を貼り、これにかけて、中央に館蔵印(書)を捺している。第一丁の表に「御自筆之写」と「寛」を、一丁裏にかけて記し、二丁表から四丁表まで「目録」を、五丁表から三八丁表まで「寛」に始まる寛政律本文を、三九丁表から四〇丁裏まで「御刑法牒附目録」を、四一丁表から八〇丁裏まで、「附」を記す。

各条項に便宜上付した番号は、蝦名氏の設定した番号と京大本の条項配列を参照しつつ、新たに構成したものであるが、当

初あるいは最終段階のテキストを示すものではない。蝦名氏の番号との主な違いとしては、新たに冒頭の刑法名目で戸⁽¹⁾から贖刑(6・7)まで条文番号を付している。四九火附(106・107)は、蝦名氏は「放火罪について文化元年(一八〇四)加えられた規定」として、復原条項中には加えていない。欠けている74条は、蝦名氏の67条「手壹本足壹本を折或ハ一眼を潰候者鞭三十」である。114条は、蝦名氏にも京大本にも見られない。欠ける112条は、蝦名氏の112条「器材之類自分子を以取替候者同様之事」である。なお、本文の前にある「目録」は、転写がくりかえされたせい、甚だしく混乱しており、この箇所のみ、本文に従って順序を整理し直したことを付言しておく。⁽¹⁹⁾

京大本に見られぬ主な箇所(※印)は、冒頭の「御自筆之写」⁽¹³⁾「目録」と、後半の「御刑法附目録」および附のうち、一〇、一七〜二九、三二〜四八である。しかし、本条についても附において、しばしば異同がみられ、他写本との比較検討を要する部分が多数存在する。

註

(13) 前掲拙稿。

(14) 田部 芳「旧津軽藩法律一斑」『法学協会雑誌』第一〇巻第二号

〜第九号、明治二十五年。

(15) 蝦名B。

(16) 蝦名氏の用いられた四種の写本のうちの一が、今回紹介する『御刑法書之写』である(蝦名B、一二三頁)。

(17) 弘前市立弘前図書館「弘前図書館郷土資料目録」第二巻「岩見文庫郷土資料目録」その一(昭和三十六年、二八頁)。

(18) 蝦名B、四四〜四五頁。

(19) 「目録」の配列順をそのまま示すと、

二丁表 上段 (一)〜(八)、(一八)、

下段 (九)〜(二七)、(二八)、

二丁裏 上段 (一八)〜(二七)、(三八)・(三九)、

下段 (二九)〜(三七)、(四七)、

三丁表 上段 (四〇)〜(四六)、(六一)、(六三)・(六四)、

下段 (四八)・(五〇)〜(五五)、(五八)、(六〇)、(七

二)、(七四)、

三丁裏 上段 (六五)〜(六八)、(七〇)・(七一)、(八三)〜(八

五)、(八七)・(八八)、

下段 (七五)〜(八二)、(九二)〜(九四)、

四丁表 上段 (八九)〜(九一)、

下段 (九五)〜(九七)、(九九)・(一〇〇)。